

DO-IT Japan REPORT 2021





出会いの力、出会いの質

子どもたちや若者たちが、自身の参加を阻む社会的な障壁を前にして、自ら何かを選び取り、新しい一歩を踏み出す力を支える上で大切なことは何でしょうか。DO-IT では、日頃の生活では出会う機会がなかった人々、できなかった体験との出会いと、そこから学んだ新たな視点や価値観が大きな力となると考えています。私たちが大学教育へのアクセス保障を強く支持する理由もそこにあります。DO-IT のプログラムでも、夏季プログラムなどの実際に出会う機会と、オンラインで継続的に交流する機会の両方を作る取り組みを、2007 年の開始当初から続けてきました。

今日現在、私たちは未だ、2019 年に始まったコロナ・パンデミックという大災害の只中にいます。社会活動や交流の制限、特に、新しい場所や人々と出会う機会の制限は、もはや当たり前のこととなりました。この制限は DO-IT の「実際に出会う」取り組みの大きな障壁となっています。もちろんオンラインであっても、対話を繰り返し、何度も丁寧に積み重ねることで、一期一会の出会いに匹敵する力を持つことができると感じています。また、オンライン環境の拡大は、障害のある人々にさまざまな情報や機会へのアクセシビリティ向上をもたらしています。まさに私たちが待ちに待った素晴らしい変化が日々拡大しています。ただし、オンラインだけしかない環境では、一期一会の出会いの質はどうしても制限されてしまうこともまた、事実です。誰かとオンラインでリアリティを共有しようとしても、既存の技術には未だ大きな制限があることを実感させられます。また、オンライン環境では、あらかじめ用意されたこと以外の余白の部分が起こりにくく、予想外の出会いや発見を生み出す力にも欠けています。

そもそも、人間の学びは、思った以上に、自らが身を置いているその瞬間の、リアルな環境や文脈に埋め込まれて成り立っているものです。たまたまそばを通りがかった先輩と偶然に出会い会話すること、時と場所と空気を誰かと共有して、そこで起こった思わぬ事件と一緒に経験し、語り合うこと、相手の言葉以外から感じられる熱意や信条を感じることに。そんな経験を通じて出会った視点は、やがて個人の中に生命を得て、その後の人生を支える価値観の一つとなっていくのではないかと思います。だからこそ、私たちはオンラインでもオフラインでも、そうした豊かな機会を増やす努力が必要であることを痛感しています。

今、世界的な激動と混沌に、私たちの権利の足元が揺るがされるような状況が訪れています。戦争や災害は、人々が長い努力で積み上げてきた権利をあっという間に奪い去ります。そんな時代に、障害のある子どもたち・若者たちがリーダーシップを発揮すること、前を向き一歩を踏み出す力を DO-IT は支えたいと考えています。そうした力を支えられる出会いのありようのこれらについて、意志を持って取り組む重要性を感じています。

DO-IT Japan ディレクター
近藤武夫



DO-IT Japan 2021 REPORT

Diversity, Opportunities, Internetworking and Technology

巻頭言「出会いの力、出会いの質」	02
DO-IT Japan とは	04
DO-IT Japan が大切にしていること	04
DO-IT Japan の 3 つのプログラム	05
1 スカラープログラム	06
1-1 夏季プログラム	08
夏季プログラムを終えた 2021 スカラーの感想	16
1-2 夏季プログラム聴講生	25
1-3 特別聴講生プログラム	26
1-4 夏季プログラム後に行われるスカラープログラム	28
2 パルプログラム	30
3 DO-IT Japan の様々な活動	31
4 スカラーたちの活動	34
2年目のスカラーたちの姿	34
インタビュー：進学・就職したスカラーたち	35
5 DO-IT Japan スカラーのデータ	41
6 共催・協力・後援	42

DO-IT Japanとは

DO-IT=Diversity, Opportunities, Internetworking, and Technology

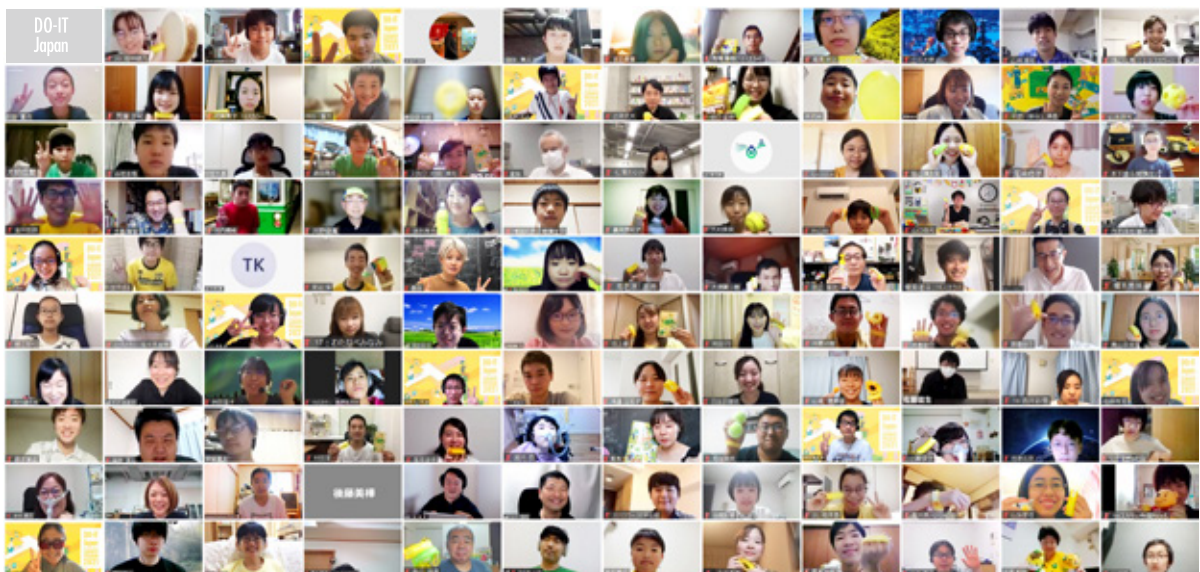
DO-IT Japan(ドゥーイット・ジャパン)は、障害や病気のある若者の高等教育への進学と、その後の就労への移行を支援することを通じて、障害のある若者の中から未来のリーダーを育成するプロジェクトです。DO-IT Japanでは、参加者に様々な機会を提供するプログラムを、産学連携により開発・提供しています。プログラムでは、テクノロジーを活用して自らに最適な学び方を体験することを軸に、大学に進学した後のキャンパスライフを体験したり、障害のある学生が参加することを前提としたインターンシップや海外研修に参加するほか、DO-ITコミュニティでの年間を通じたオンラインでの活動に参加することを通じて、多様な価値観を持つ人々や同世代の仲間たちとの交流や情報交換を行います。

これらの経験から、参加する障害のある児童生徒・学生は、自分自身にとって最適な学び方や生活の仕方、障害の社会モデル、自己決定やセルフアドボカシー(自己権利擁護)といった考え方を知ることに加えて、将来の夢の実現や、社会活躍とリーダーシップに関する学びの機会を得ることができます。

DO-IT Japanが大切にしていること

学校や職場で自分が活動に参加するときには、他の人と異なる取り扱い(合理的配慮など)が必要な場合があります。本来、学校や職場が環境を整え、本人と対話してより良い修学・労働環境を目指すことが期待されますが、現実には最初からそうした環境が整っているところばかりではありません。本人が納得できる「自分に適した環境」を実現するためにも、障害のある児童生徒・学生から、希望する配慮を相手に求めていくセルフアドボカシーも必要です。

DO-IT Japanはプログラムを展開する中で、障害や疾患のある若者が、自分に合った学び方や生活の仕方を自分で選び、周囲に必要性を伝えていくこと、つまり自己決定とセルフアドボカシーを大切にしています。DO-ITのプログラムへの参加を通じて、自分自身がどうしたいかを考えられる充実した試行錯誤の機会を得た上で、自己決定し、他者にニーズを相手に伝える経験は、障害のある若者たちの、その後の社会参加の幅や可能性を広げていくとDO-IT Japanは考えています。そのための参加者のバックアップや、実体験する機会作りをおこなっています。



DO-IT Japanの3つのプログラム

DO-IT Japanは、「1) スカラープログラム」、「2) パルプログラム」、「3) スクールプログラム」の、3つのプログラムを行っています。障害や病気のある若者、その保護者、支援に携わる教員・学校等、幅広い層へ向けてインクルーシブな社会に向けた機会の提供、情報を発信しています。

毎年春に募集

1. スカラープログラム メインプログラム

障害や病気のある若者を対象とした参加型プログラムです。選ばれた参加者は「スカラー」と呼ばれます。スカラーは、年間を通じた様々なプログラムに、希望する限り継続して参加することができます。

その他、児童・生徒(小学3年生以上)を対象とした年度でのプログラム「特別聴講生プログラム」や、スカラープログラムの一部を聴講することができる「夏季プログラム聴講生」の選考を行っています。

詳細は P6 より

ウェブサイトにて登録可能

2. パルプログラム 情報提供

障害や病気のある本人(年齢は問わない)と、その保護者を対象とした情報提供を目的とした登録型プログラムです。ウェブサイトに参加登録することができます。イベント参加の案内や事例・テクノロジーの情報を、メールで受け取ることができます。

詳細は P30

3. スクールプログラム 環境整備

障害や病気のある若者に関わる学校や教員を対象とした、学校内にインクルーシブな学習環境を整備することを目的としたプログラムです。共催・協力企業と共に、テクノロジーやサービス・支援に関するノウハウを提供しています。プログラムは、随時開催・選抜にて実施しています。

※ 2019年度より、共催企業の日本マイクロソフト株式会社と共にプログラムを実施しております。

詳細は P42

Scholar Program

障害や病気のある児童・生徒・学生対象

PAL Program

障害や病気のある本人と、その保護者対象


School Program

学校、教員対象

1

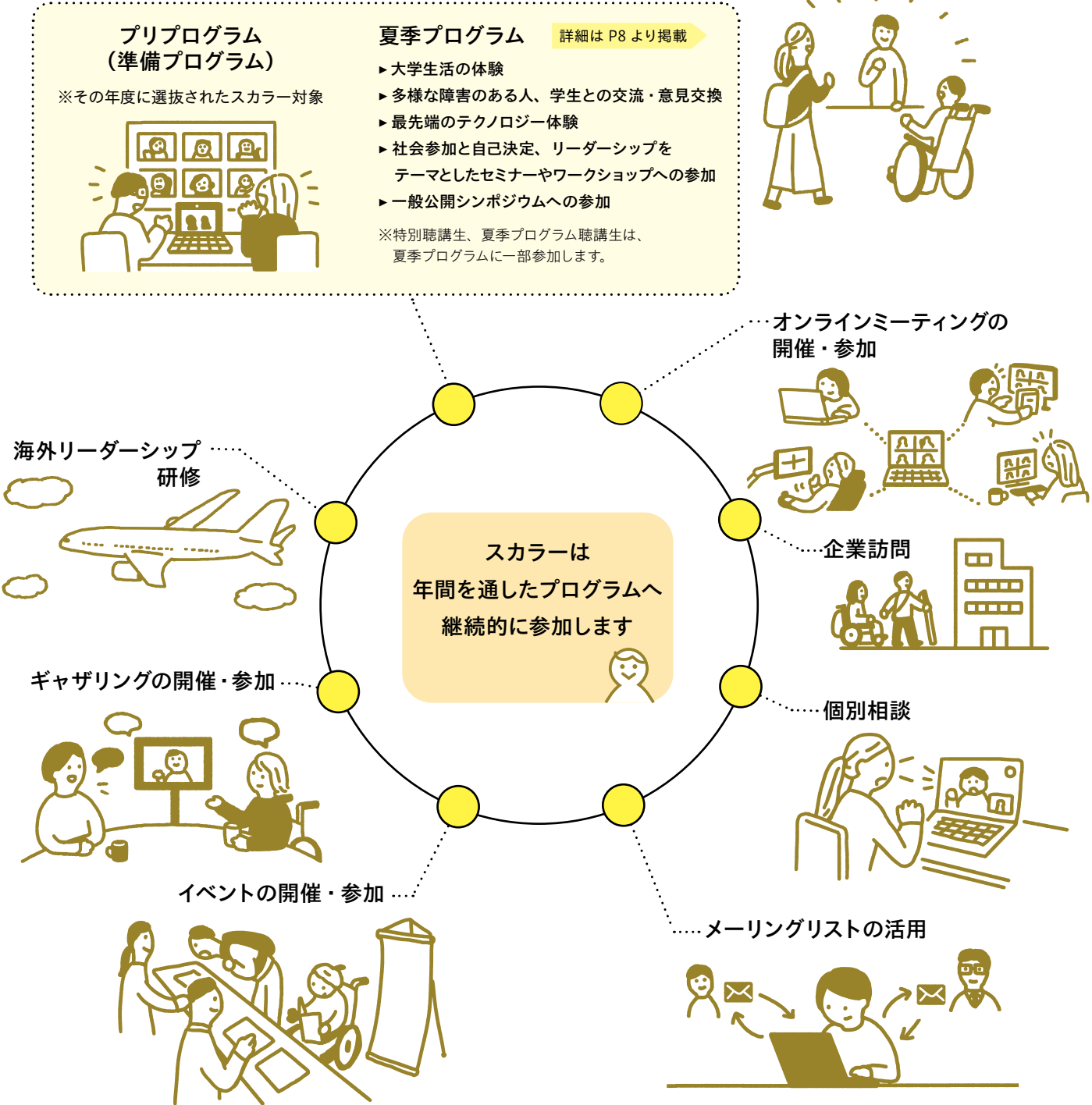
スカラープログラム

スカラープログラムは、障害のある若者を対象としたリーダー育成プログラムです。年度末、ウェブサイトにて翌年度のプログラム参加者の募集要領が公開されます。以下の2つの枠でプログラムを開催し、参加者を募集しています。

スカラープログラム (メインプログラム)		特別聴講生プログラム	
<p>毎年春に、プログラム参加者の募集・選抜が行われます。選抜された参加者は「スカラー」と呼ばれます。「夏季プログラム」への参加から始まり、その後開催される様々なプログラムに年間を通じて継続的に参加することができます。</p> <p>スカラーは、様々な用意されたプログラムの参加に加え、そこで出会う多様な障害のある仲間やピア、障害支援の専門家等、多様な価値観をもつ人と出会い、意見交換する機会を得ます。これらのプログラム参加や機会を通じ、社会で活躍する「リーダー」が育つことを期待し、プログラムを行っています。</p>		<p>毎年春に、プログラム参加者(小中学生)の募集選抜が行われます。選抜された参加者は「特別聴講生」と呼ばれます。様々な学び方と多様な価値観にふれ、学びの芽を育てることを目的としています。夏季プログラムで行われる、1)テクノロジーコース、2)ダイバーシティコースのどちらかに参加することができます。また、年度末まで事務局へ個別相談をすることができます。</p>	
対象	障害や病気のある※1 中学生から大学院生	対象	障害や病気のある※1 小学3年生から中学生
人数募集	10名程度	人数募集	1) テクノロジーコース 2) ダイバーシティコース } 各10名程度
期間参加	年間を通じ、プログラムに継続的に参加	期間参加	選抜された年度末まで参加
求める参加者像	<ul style="list-style-type: none"> ● テクノロジーを活用した多様な学習方法を知り、実践を希望していること ● スカラープログラムへの参加を強く希望していること ● 進学/就労へ向けた意欲があること ● 自分の興味や関心のある物事について探求していること ● DO-IT Japanが目指す、多様性理解を広げることに関心があること、またその活動に向けてリーダーシップを発揮できること 	求める参加者像	<ul style="list-style-type: none"> ● テクノロジーを活用した多様な学習方法を知り、実践を希望していること ● 特別聴講生プログラムへの参加を強く希望していること
選考までの流れ	<p>4~5月上旬 応募 → 5月 書類選考 → 6月 面接</p> <p>面接から分岐: - スカラーに採用 - 夏季プログラム聴講生を選考(一部)</p>	選考までの流れ	<p>4~5月上旬 応募 → 5月 書類選考 → 6月 面接</p> <p>面接から採用: 特別聴講生に採用</p>
プログラム内容提供プログラム (プログラム内容は毎年変更します)	<ul style="list-style-type: none"> ● 夏季プログラムを始めとする年間を通じたスカラー向けのプログラム ● オンラインミーティング、ギャザリング、イベント ● メンタリング・個別相談 ● 大学生など対象を設けた特別プログラム (海外研修、企業訪問、インターンシップ等) <p>今年実施したプログラムの内容は P8 より掲載</p> <p>[夏季プログラム聴講生] 詳細は P25</p> <p>スカラープログラムに応募し、面接に進んだ一部の生徒・学生を「夏季プログラム聴講生」として選考しています。</p>	プログラム内容提供プログラム (プログラム内容は毎年変更します)	<ul style="list-style-type: none"> ● 夏季プログラム内で行われる特別聴講生用プログラム(1日) 1) テクノロジーコース 2) ダイバーシティコース ● 個別相談 <p>今年実施したプログラムの内容は P26 より掲載</p> 

※1 障害の種別は問いません。障害や病気の認定については、医師による診断があることを基本としますが、診断がなくとも、読み、書き、コミュニケーションに困難がみられる等の専門家による明確な示唆(検査や教育相談を通じたもの)がある場合も、応募資格があります。

スカラープログラム：年間スケジュールの例 (プログラム内容は毎年変更します)



その年度選抜されたスカラーは、まず「夏季プログラム」に参加します。ここでは、テクノロジーの活用、大学生生活の体験、障害と多様性の理解、自己決定やセルフアドボカシー等のテーマに関わるプログラムに参加します。

その後は、毎月開催される「オンラインミーティング」に参加し、スカラーやDO-ITスタッフをはじめとするDO-ITコミュニティに参加します。オンラインミーティングは、夏季プログラムと同様、活発な議論の場となっています。また、数か月ごとに開催される「ギャザリング」は、スカラー同士が直接集まり、交流する機会となっています(オンラインでも参加

が可能)。その他、DO-ITのスタッフや専門家、ピアによるメンタリング・個別相談の実施、企業のインターンシップへの参加、各種の主催イベントの開催・参加、海外でのリーダーシップ研修等、年間を通じた様々なプログラムが行われます。

スカラープログラムには、障害の種別や年齢、所属が異なるスカラーや、様々な価値観をもつ人が多数参加しています。出会い、意見交換する機会は、スカラーが将来のロールモデルを得たり多様な価値観を知り、将来の社会的包摂を導くリーダーシップを高め合う学びの機会となっています。

1-1 夏季プログラム

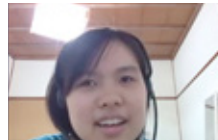
夏季プログラムは、その年度選ばれたスカラーが最初に参加するプログラムです。大学の学びを経験すること、様々な価値観について学ぶこと、そしてテクノロジーをどのように自分で活用していくかについて、体験を通じて学ぶ機会としています。さらにそこでの学びを、今後自分の地元に戻ったときに、学校や必要な相手に対して伝えていき、自分なりの学び方や生活の方法を得ていく、一連のプログラムのもとになるものとして行っています。

夏季プログラムでは、多くの方がプログラムに参加します。障害や福祉の専門家であるアドバイザーや夏季プログラムに参加する他大学・団体のスタッフとのやりとりから、自分のニーズに合ったテクノロジー利用はどのようなかを学ぶ。大学で出会う先輩や友人として大学生チューターと出会い、プログラムで時間を共にしながら意見交換を行う。そして、過去に選抜されたスカラーが先輩として交流し、ピアと出会う機会となっています。

[2021スカラー]



岩下 唯愛
Iwashita Yume



佐藤 殊菜
Sato Shuna



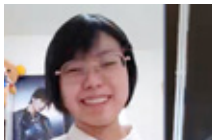
森田 康生
Morita Kosei



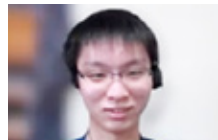
正野 寛一郎
Masano Kanichiro



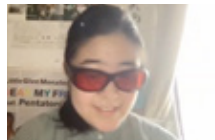
清田 みお
Kiyota Mio



石田 華蓮
Ishida Karen



永長 大二郎
Nagaosa Daijiro



北名 美雨
Kitana Miu



楠本 太一
Kusumoto Taichi

準備プログラム

0

プリプログラム

夏季プログラム参加の前段階として、1ヶ月かけてオンラインで事前プログラムを開催します。毎週金曜日と土曜日に2時間ずつ行われ、意見交換、及び、課題を実施することで、テクノロジー利用の基礎から始まり、様々なことを学びます。

日時	各テーマ
1週目 7/9,10	▶テクノロジーやインターネットの基本的な操作を知る ▶障害の「社会モデル」を知る
2週目 7/16,17	▶高等教育機関における障害のある学生への支援を知る ▶自立と自己決定：自分の時間の過ごし方から自分のやりたいことやニーズを整理する
3週目 7/23,24	▶スライドの作成・発表(1)：合理的配慮を求める
4週目 7/30,31	▶スライドの作成・発表(2)：合理的配慮を求める
最終日 8/6	▶この夏達成したい目標を語る

プリプログラムで、特に参加するスカラー達にとって初めてのことになるのは、自分のニーズをまとめ上げて、それを相手に伝えていくということです。自分が配慮を求めたい場面を設定し、プレゼンテーションを作成して、どういう配慮が必要かを相手に説明する機会を、夏季プログラムで行っています。どのように相手に伝えていくか、プログラム参加者と意見交換しながら時間をかけて作りあげていきます。そこには先輩スカラーが参加し、スカラーの自己決定を尊重しながら「あなたはどうしたいのか?」とスカラーに問いかけます。自分の考えを言葉にしていくことに繋がっています。

障害と多様性を理解する

夏季プログラムのオンライン会場「Microsoft Teams」に集合!会場には2021スカラー、スカラーをサポートする先輩スカラー、DO-ITアドバイザー、DO-ITスタッフ(プログラムをサポートしてくれる大学・団体教職員)、大学生チューター(先輩・同級生としてプログラムに参加する大学生)が集まり、夏季プログラムがスタートしました。

レセプション・プログラムガイダンス

9:00

ディレクターから歓迎の挨拶があり、2021スカラーは自己紹介と夏季プログラムでやってみたいことを発表しました。先輩スカラー、大学生チューター、アドバイザー、スタッフと夏季プログラム参加者が全員集まり、スケジュールやプログラム参加で大事にしてほしいことを共有しました。



トークセッション「自立と依存を考える」

11:30



熊谷晋一郎
DO-ITスタッフ

最初のセッションは「自立」がテーマ。自立とは何なのだろう?障害のある自分たちにとって、依存先を多くし各々への依存度を浅くすることは「自立」なのだろうか?スカラーはスタッフから投げかけられた言葉を元に、自分の想いや考えを言葉にしていきました。



先輩セッション「大学について語ろう」

14:00



遠山弘晃
2010スカラー



濱地音安
2018スカラー

大学生の先輩スカラーと意見交換する時間。進路を決めたきっかけ、入試の話、大学に求めた合理的配慮のこと、まわりの人との付き合い方、身体との付き合い方、サークルの余暇活動等の話題提供を受け、楽しい雰囲気の中で活発に意見交換が行われました。

ウェルカムパーティ 2021!

18:00

新たな仲間となった2021スカラーを歓迎する時間。プログラム参加者が集まり、一日目を終えて話したりなかったことや聞いてみたいこと等、様々な話題を通してお互いを知る時間を過ごしました。



大学の生活を体験する

2日目のテーマは「大学生活」。前半は、キャンパス巡り、大学講義体験、バリアフリー支援室のスタッフとの意見交換の時間を過ごしました。後半は、夏季プログラムのメインの一つと言える「合理的配慮を求める」発表の時間。配慮を求めたい相手に対し、プリプログラムより作り上げた配慮を求めるプレゼン資料を用い、配慮を求める体験を行いました。

先端研・遠隔キャンパス体験

8:00



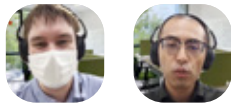
先端研にいるスタッフとオンラインで接続し、スタッフを誘導しながら見たい場所へ行く計画を実行。歴史ある建物を見たり、並木研究室ではバリアフリーな実験室「インクルーシブデザインラボラトリー」を見学させていただきました。



並木重宏
東大先端研
准教授

9:00

大学を知る(1)「研究室訪問・講義：中村・宇佐見研究室」



Jesper Ilves
研究室
大学院生

杉山太香典
東大先端研
特任助教

研究室紹介

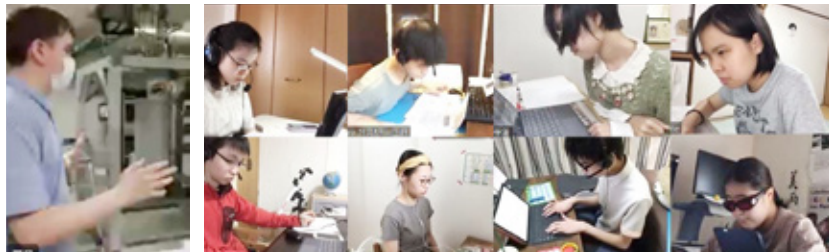
量子情報物理学分野。量子力学の原理に基づく新しい情報処理・通信・高精度計測などを目指す量子情報科学の発展に、物理と工学の側面から取り組みを行う研究室。



研究室
ウェブサイト

現地の実験室と回線を繋げて研究室紹介をしていただきました。「大学講義：量子コンピュータの基本」を受講し、最先端の研究を意見交換しながら学ぶ時間となりました。講師からのキャリアパスの話題提供では、自分の将来や進学について知見を得る時間となりました。

※複雑な量子ビット回路のイラストを見ることが難しいスカラーへ、3Dプリンタで作成した模型の配布がありました。





大学を知る(2)「東京大学のバリアフリー支援」

11:00



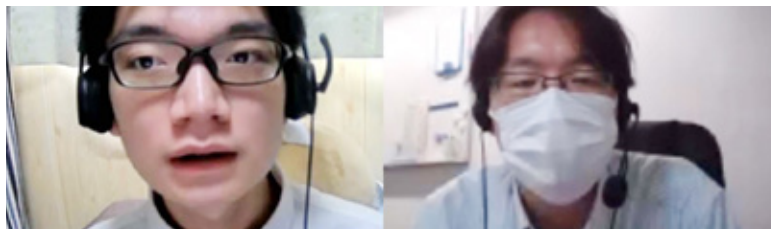
切原賢治
准教授



小野彰子
コーディネーター

支援室
ウェブサイト

専任職員の切原先生・小野さんより、東京大学が行っている障害学生への支援の例や支援室の業務内容を話題提供いただきました。支援室の沿革と概要や活動内容、支援を受けるまでの流れや具体的な支援例を聞き、数多くの障害学生が大学で配慮を受けて学んでいることを知る時間となりました。



セルフアドボカシー「『合理的配慮』を求める」

13:30



配慮を求めたい相手に対し、2021スカラーはプリプログラムより作り上げた配慮を求めるプレゼン資料を使い、配慮を求める体験を行いました。

プログラムには、障害のある生徒・学生の支援の専門家やスタッフ、先輩スカラー、同級生に近い視点をもつ大学生チューターと多様な層が集まり、それぞれの立場から意見を発します。「どうしてこの方法を選んだの?」「なぜその支援が必要なの?」。参加者と意見交換を重ねる中で、2021スカラーは、自分の求める配慮はなぜ必要なのか、相手とどう合意形成を育むかを考える時間となりました。この活動の後、実際に自分の求めたい相手に配慮を求める活動へと繋がっています。



アイスブレイクナイト1

17:00

2021スカラーと一部のスタッフのみの少人数でのゆっくりとした時間。2日目の感想やスカラープログラムに参加してみたいと考えたきっかけ、障害を抱えて日頃感じている気持ちなどを語り合いました。



玉木幸則
DO-ITスタッフ



脇山輝衣菜
DO-ITスタッフ



小暮理佳
DO-ITスタッフ



奥山俊博
DO-ITスタッフ



最新のテクノロジーを知る／テクノロジー活用で学びや生活を豊かにする

3日目のテーマは「テクノロジー」。身近にあるパソコンやタブレットを活用し、自分にあった学び方を知る体験をしました。前半は、共催の日本マイクロソフト株式会社よりテクノロジーに関する話題提供が行われました。後半は、2年次スカラー（2020 スカラー）がプログラムに加入！ニーズに沿うグループにわかれてテクノロジーのフィッティングを行いました。

9:30

共催
プログラム

マイクロソフト・スペシャルセッション2021 スペシャル講義(1)「アクセシビリティとは」

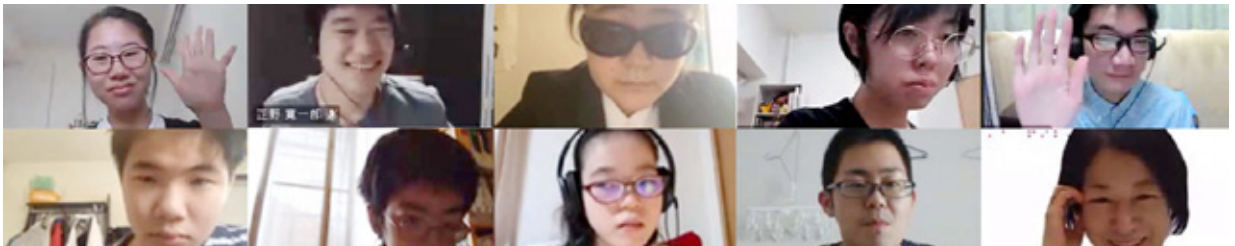


大島友子
プリンパル
アドバイザー



山口俊光
DO-IT スタッフ

アクセシビリティとは、利用者が機器・サービスを円滑に利用できること。「アクセシビリティは義務であり、チャンスでもある」と題し、アクセシビリティ機能の紹介(WindowsやMicrosoft 365、Seeing AI等)と、そこから生まれるイノベティブな発展について話題提供いただきました。自分の身体にあった操作方法を知る時間に加え、意見交換ではデジタルインクルージョンの実現についても話が膨らみました。



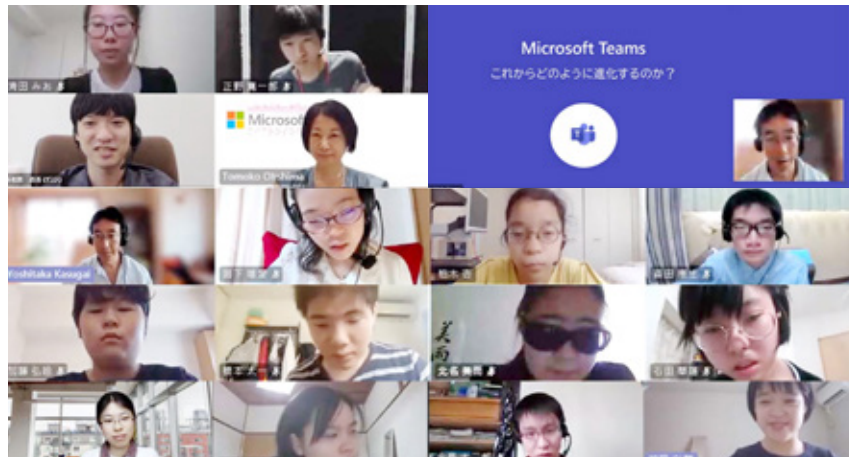
11:30

スペシャル講義(2)「Microsoft Teamsの活用」



春日井良隆
マーケティング&
オペレーションズ部門

プリプログラムから毎日利用しているMicrosoft Teamsを活用した、リモートでのコミュニケーションを円滑にする方法について話題提供いただきました。今後加わる新しい機能もあり、これからどのように進化してゆくのか？ダイバーシティなどの視点も大切にしながら開発が進められている様子についても知る時間にもなりました。



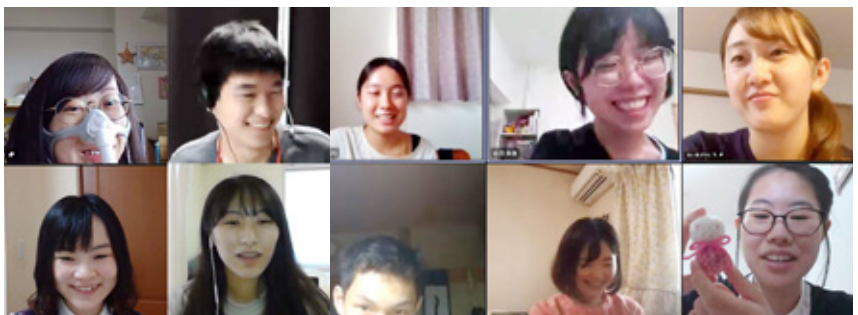
11:00

スペシャルツアー！

11:30

Break & Lunch

夏季プログラム参加者がご飯を食べたり休憩する時間。会話の話題は、趣味の話から大学生活のこと、誰にも話したことのない将来の夢の話まで。オンラインであることを忘れ、ぐっと心の距離が縮まるフリータイムとなりました。



13:30

テクノロジーフィッシング ※3つのグループにわかれまして。

[ルームA]「視覚をうまく使う・付き合う」

-  **山口俊光**
DO-IT
スタッフ
-  **大村美保**
DO-IT
スタッフ
-  **風早史子**
DO-IT
スタッフ



視覚障害等により紙の印刷物や書籍を読むことが困難な場合、テクノロジーを活用したり少し工夫を施すことで効率的に勉強や読書を楽しむことができます。書見台や拡大読書器の活用、スキャナー、タブレット・パソコンを使った読み上げ機能等の紹介を受け、自分の学習や生活をよりよくする方法を話し合いました。

[ルームB]「予定やタスクをマネジメントする」

-  **村田 淳**
DO-IT
スタッフ
-  **近藤武夫**
DO-IT
ディレクター

計画や見通しを立ててやるべきこと、やりたいことを遂行していくには、ある程度の技やコツがあります。実はどこかで「ちゃんと」を気にして行動が阻まれている場合があります。自分のやりたいことリストを準備し、リマインダーやマインドマップアプリなどのツールをうまく活用してやりたいことを形にしていける方法論を学びました。



[ルームC]「多様なツール・アクセシビリティ機能を活用する」

-  **渡辺崇史**
DO-IT
アドバイザー
-  **巖淵守**
DO-IT
アドバイザー
-  **山口俊光**
DO-IT
スタッフ
-  **松清あゆみ**
DO-IT
スタッフ
-  **奥山俊博**
DO-IT
スタッフ

パソコンを支援機器と組み合わせ、自分にあう操作方法を探し、試す体験をしました。自宅に送られてきた支援機器を手元に置き、対話しながら複数のカメラで多角的に自分の姿を映してフィッシングをしました。支援者として参加依頼した人に必要な介助を頼む経験にもなりました。



アイスブレイクナイト2

障害の専門的な知識をもつアドバイザー、先輩スカラー・大学生チューターが、それぞれオンライン部屋を作成。スカラーは自分の行きたい部屋に集まり、相談や自分の考えをじっくり話し合う時間を過ごしました。



18:00

多様な価値観に触れる / 自分の意見を発信する

4日目は「コンカレントセミナー」と称し、自分の関心のあるセミナーを決め参加する機会を設けています。同時刻に複数の授業が行われる大学の授業選択の体験！今年は11コマのセミナーが行われ、話題提供者と夏季プログラム参加者が集まり、活発な意見交換を行いました。

9:00

コンカレントセミナーA

<1> 障害のある人の雇用・労働を支援する取り組みに潜む障壁をなくすには

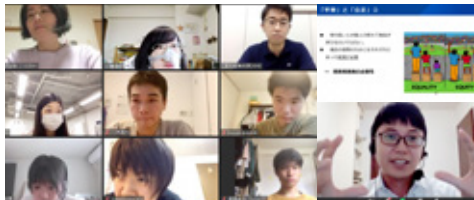


中村健太郎
厚生労働省・障害者雇用対策課

日本の障害者雇用施策と提供サービスの概要を話題提供いただきました。現在の雇用・労働施策では幅広い支援策がありますが、施策が自分たちの就労時の希望にあっているか、自分が実現したい働き方と雇用環境とのギャップはどこにあるか。雇用機会を上げる上での課題について議論しました。



小林孔
厚生労働省・障害者雇用対策課



<3> 障害者手帳の種別、福祉サービスの内容は、誰がどのように決めてきたのか？

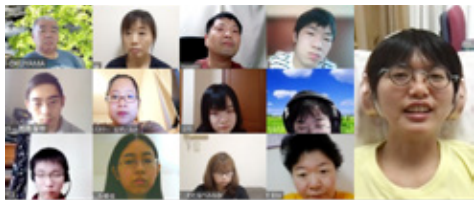


玉木幸則
社会福祉法人西宮市社会福祉協議会

福祉サービスを活用して豊かな生活を送るために、多種多様なサービスの中から、その全体像を知り、どうすれば必要なサービスを利用出来るようになるのか？障害者手帳はなぜ「身体・知的・精神」の3種類なのか？福祉サービスの概要を知り、残された課題について議論しました。



大村美保
筑波大学



11:00

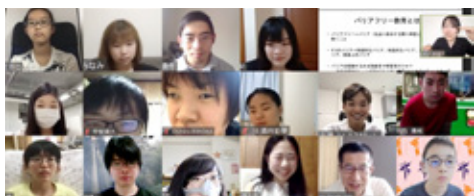
コンカレントセミナーB

<5> あなたが『自身の障害について相手に伝えたい』と思うとき



飯野由里子
東京大学

外見から「見える障害」のある人も、外見では「見えない障害」のある人も、実際の困難さを誤解されたりする経験があると思います。自分の障害について誰かにカミングアウトすることが必要な時、相手にどのように伝えているか、伝える事自体をどう考えるかを、お互いの経験を踏まえて話し合いました。



コンカレントセミナータイムスケジュール

A 9:00-10:30	B 11:00-12:30	C 13:30-15:00
(1) 障害のある人の雇用・労働を支援する取り組みに潜む障壁をなくすには	(5) あなたが『自身の障害について相手に伝えたい』と思うとき	(8) 身体の声に耳を澄ませよう
(2) 教育制度のメインストリームで、障害に対する準備は始まっているか？	(6) 企業における「障害の価値」とリーダーシップ	(9) 社会課題の本質を把握し、飛び込み、変化を起こす
(3) 障害者手帳の種別、福祉サービスの内容は、誰がどのように決めてきたのか？	(7) 「JR 乗車拒否問題」とは何だったのか	(10) 私たちの自由を支える医療・阻む医療
(4A-3B) 「対話」を考える - 大学における障害学生支援		(11) 「支援者」になりたいあなたへ

<2> 教育制度のメインストリームで、障害に対する準備は始まっているか？



春田鳩磨
文部科学省・初等中等教育局教科書課

日本と海外の障害のある児童生徒の学習参加を保障する取り組みについて話題提供いただき、今後の教育機会のあり方について議論しました。特別支援教育は一部の限られた人への保障ではなく、教室で共に学ぶために多様性があることを前提として更に広がる必要性があることが挙げられました。



バーンズ 亀山 静子
ニューヨーク州認定スクールサイコロジスト



<4> 「対話」を考える - 大学における障害学生支援



村田 淳
京都大学

大学で合理的配慮を求める時に、合理的配慮を検討する過程における「対話」とはどのようなものか。参加者とスタッフが共に考えていく参加型のセミナーが連続で行われました。1コマ目は、大学における障害学生支援、建設的対話の必要性等の情報提供が行われました。



星加良司
東京大学

2コマ目は、参加者の事例をもとにディスカッションが行われました。大学とはどのような場所で、学生は何が必要になるのか。大学にはどのような人（教職員や支援者等）がいて、それぞれの立場でどのようなことを考えているのか。立場の違いを考慮することで「対話」を考える時間となりました。



西村優紀美
富山大学



富岡美紀子
明治学院大学

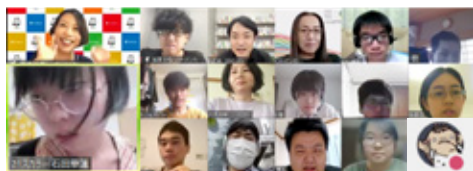


〈6〉企業における「障害の価値」とリーダーシップ



横溝知美
ソフトバンク
株式会社

企業で働く際、自身の障害が雇用の壁になってしまうのではと不安を抱えるケースは少なくありません。障害があっても、実際に企業でご活躍されている方をゲストに招き、業務の進め方や自身の障害と上手な付き合い方、人生を楽しむコツ等をお話いただき、社会参加における自身が考える価値と働き方について意見交換しました。



〈7〉「JR 乗車拒否問題」とは何だったのか

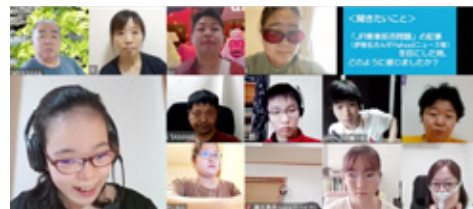


野崎瑛理子
日本放送協会

車椅子ユーザーの言動に猛烈なバッシングがありました。一方で、その発言の裏に大きな社会的問題が存在していることも顕在化しました。メディアを生業とする人々は、社会問題をどのように表現し、問題の本質に迫ろうとしているのでしょうか？ 障害を取り巻く表現や偏見について議論しました。



大村美保
筑波大学



13:30

コンカレントセミナーC

〈8〉身体の声に耳を澄ませよう

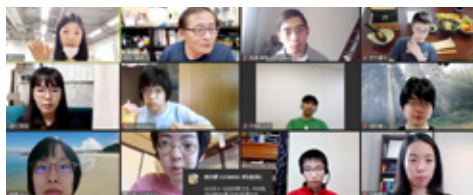


渡辺崇史
日本福祉大学

例えば痛みや不快感を感じた時、身体はどのように私たちに伝えているのでしょうか。どこからのサイン？ そのサインは赤信号？ 自分自身に耳を澄ませ身体の声（サイン）をキャッチする方法、危険信号へ向かう前の対処法について、参加者の経験を共有しながら語り合いました。



松清あゆみ
東大先端研



〈9〉社会課題の本質を把握し、飛び込み、変化を起こす



照井直樹
元内閣官房
まちひとしごと
創生本部、
現厚生労働省
障害福祉課

現在の日本では、町や地域の様々な場所で解決すべき問題が吹き出しています。「社会課題を解決する」ことに自分がプレーヤーとして飛び込むならどのような参加ができるのか。社会課題解決に取り組む行政や中間支援組織の方をゲストに招き、議論しました。



山内泰
株式会社
ぶくしごと



〈10〉私たちの自由を支える医療・阻む医療



土島智幸
医療法人稲生会

呼吸器等の医療を受けている人には「なにがあつたらいけないから」と活動の制限や参加を断念せざるを得なくなる事があります。一方で、自己決定を支えようとする医療従事者もいます。自由と安全、その現実と理想の間について常識にとらわれずに話し合いました。



吉成あみ
医療法人稲生会



〈11〉「支援者」になりたいあなたへ



玉木幸則
社会福祉法人
西宮市社会福祉
協議会

「支援者」はどのような存在か、整理して考えたことはあるでしょうか。一般的に語られる支援とアドボケイト（権利擁護）は、どのような違いや共通点があるのでしょうか。このような問いを交えながら「支援者」について考える機会として意見交換が行われました。



村田淳
京都大学



16:30

夏季プログラム修了式

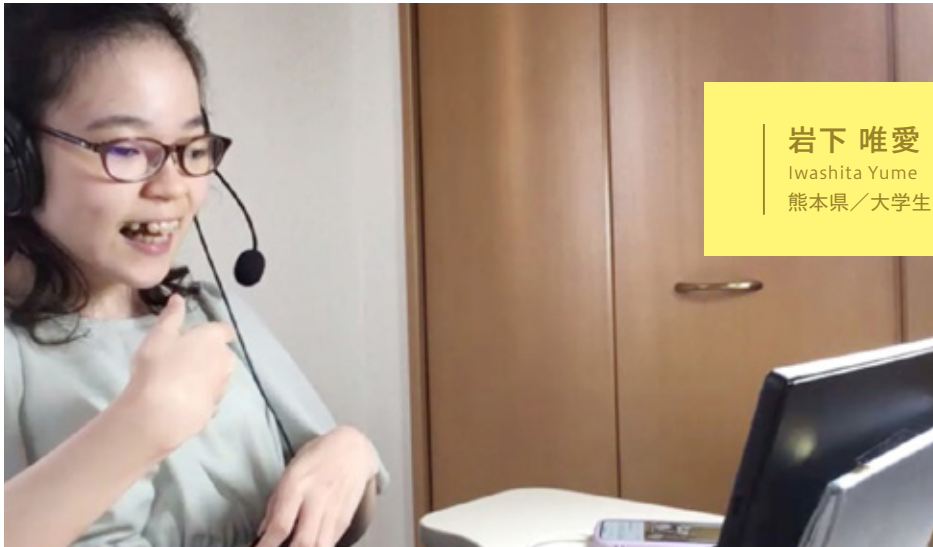
17:30

交流会

「KoiKoi (コイコイ) パーティ!!」

夏季プログラム参加者が、今年のテーマカラー「黄色」を持って大集合！ KoiKoi 恋するほど好きなものを話しかつたり…最終日を飾る賑やかな時間を過ごしました。





私には私だけのニーズがある

私がDO-ITに参加したのは、「この社会の中で、どう生きていったらいいのだろうか」と真剣に悩んでいた時でした。そんな中で、21スカラーとしての学びをスタートした私には、多くの新しい発見が待っていました。

まず1つ目は、私自身が自分の障害と向き合っていなかったということです。これまで私は、自分は障害者であることが重要なアイデンティティということは考えていたのですが、学校生活のほとんどを通常学級で過ごし、障害についてあまり詳しく話す機会がなかったので、深く考えたことがありませんでした。私は恵まれていて、周囲の大人が私のニーズであろうことをしてくれていたの、それに慣れてしまっていたのが原因だったかもしれません。しかし、このDO-ITでは、周りの人が障害当事者ばかりなので、私のことを理解してもらうためには、私の困り感を詳しく話すことが必要でした。合理的配慮のプレゼンテーションでも、私自身が私のニーズを理解していないと伝わらないので初めて自分自身だけで向き合うことになりました。私には、何ができて、何ができないのか、自分のニーズを正確に伝えることの重要性を改めて感じました。これからは、私には私だけのニーズがあることを忘れず、必要な時に必要な配慮を求めていきたいです。

2つ目は、テクノロジーとの出会いです。私は、学校などで障害を楽にするテクノロジーの練習をしたこ

とが全くなく、パソコンを打つ時も一本指でできる限り打っていたので、タイピングがとても遅いことに悩まされていました。夏季プログラムのテクノロジーフィッティングで一本指でも楽に打てる方法を試したり、マウスを使って文字を打ったりしてみたことで、できる範囲の幅が広がると感じました。

3つ目は、DO-ITという「新しい居場所」ができたことです。これまで、私には、障害のある友達はいましたが、深い問題意識を共有できることは少なく、なかなか踏み込んだ話ができた経験がありませんでした。

しかし、DO-ITに入ってみると、そこには志が高く、夢に向かって努力している仲間がいました。このコミュニティの中では、生活している上でのちょっとした困りごと、しかし私にとっては重要なことも安心して話すことができるし、そうすることで自分では思いつかなかった解決策が見えてくることもあります。私も以前までは、こんなことを話しても伝わらない、と途中で諦めてしまうことが多かったのですが、このプログラムを通して、「伝えるからこそ、理解してもらえることもある」ということが多いということを学びました。この社会の中で私がこれからどう生きていくのか、とても楽しみです！



永長 大二郎

Nagaosa Daijiro
北海道／高校生

障害者として一人の人間として

今回の DO-IT プログラム参加は、私にとって生きる喜びを再認識する場であると同時に、お先真っ暗である人生に自信を与えてくれるものであった。

私は、人間が大好きだ。人と出会い、人と会話を持つ。私はそこに喜びを感じてならない。たった人間一人生命を与え時に奪う事もできる太陽（宇宙）の前では人間一人、人間 80 億も敵わない人間一人の人生など、無いも同然であると考え。が、人と出会い会話を持つ時、私の心は確かに弾んでいる。

今回の DO-IT で果たすことができた出会いもまた、人と会い人と会話を持つことの楽しさを教えてくれた。ついさっきまでその存在すら知ることのなかった人達と今こうして出会っている。それによって自身にどんな影響があるのかと問われても、答えにつまる。ただ楽しい、これまでそれぞれが歩いてきた道のりが重なる瞬間なのである。

私の障害は、脳性麻痺である。障害という言葉にあまり良いイメージはないかもしれない。どちらかというマイナスな要素として捉えられることが多いだろうか。特技（＝その人だけが特別によくできる技）という言葉があるが、私の特技は脳性麻痺ですと言った経験は確かにこれまで一度もない。そんな障害（麻痺った身体を持っているという事実）であるが、今回の場合は確実にプラスに働いたように思われる。障害者であったことによって、スカラープログラムにおける最難関の応募条件をクリアしたのである。障害を持つということが応募条件であるように、DO-IT プログラムの中心には、常

に障害を持った者という事実があったように感じられる。その一つが、障害の社会モデルについてである。これは、プログラム参加によって私が初めて学んだことの一つでもあった。障害の社会モデルについて今の私には貧弱な知識しかない。よって以下は今の自分の知り得る範囲で思考した末の、あくまで現時点での結果であり、全て私自身の言葉で書きたいと思う。

スカラープログラムを通して、障害の社会モデル（自身の障害）について、他の参加者の方々と交流することのできる機会が多くあった。それら一連の交流の中で終始強く感じさせられるものがあった。私の知る限りでは、社会モデルにおいて、障害とは、社会（多数を占める健常者によってつくられている世界）と関わりを持った際に障壁となるものであり、社会と関係を持たなかった場合（＝十分な配慮を受ける事のできる世界と関係を持った場合）、障害はないといったような事である。

DO-IT プログラム内では、このような見解が少なからずみられたように思う。社会との間で障害を持つだけであり、自分たちは本来障害者ではないのだと。率直な事を言ってしまうと、私はこれに納得がいかない。自ら、障害者である事を悲観し「本来障害者ではない」という言葉に、安心や希望を求めているように感じられてしまう。障害者として一人の人間として世界を生きていく上で、大切にすべき事の一つが見えてきたりもするのではないかと思う。

石田 華蓮

Ishida Karen
福岡県／高校生



自分の気持ちは間違っていない

私がこのプログラムで1番に感じたことは、人とのつながりの奇跡と、話してみることの大切さです。

私がこのプログラムに応募した理由の一つとして「より多くの人と関わりを持ちたい」というものがありました。なぜなら私は小中高普通級に通っているためなかなか障害のある知り合いや友達が少ないうえ、それどころかコロナの影響で普通の人とのつながりも途絶えていたからです。同じように障害のある方と交流することでより充実した暮らしができるのでは?とも感じました。最初は、初対面の人だらけでちゃんと話せるだろうか、と不安もありました。しかし、実際に話してみると同じような体験をした人ばかりで親近感が持て、楽しい時間を過ごせました。

また、私の中ではほぼ初対面の方たちにこんなにもぶっちゃけて話したのは初めてだったと思います。というのも高校でおねがいしている介助員さんとの関係の悩みをプログラム途中のランチブレイクやアイスブレイクナイトなどで皆さんに意見を求めました。このプログラム前まで、そのことに関してかなり悩んだり体調を崩していたりしたので思い切って話しました。すると、話すことで、自分の気持ちは間違っていない、と肯定してもらえ、その後の2学期からの対処も前向きにすることができています。また、セミナー内でも、小、中学時代に経験したことや疑問に思っていたこと(このような仕打ちは本当に受けなければいけないの?みたいな、本当に仲の良い友達でも話さないようなこと)までぶっちゃけました。でも、そうすることで、溜め込ん

でいたモヤモヤが少し薄れて、これから頑張っていこうという原動力に変えることが出来ました。そして、沢山の先輩や先生方と触れ合うことで、挑戦してみよう、と思うことができ、今も様々なことに挑戦しています。

そして、いい意味でこのプログラムの情報量ははんばなかったと思います。このプログラムを通さなければ知れなかったことが山盛りでした。もっと早くに知りたかった!とも思いました。でも、知れてよかった。

最後に、先に述べたような人とのつながりを感じる変化がもう一つ。この夏季プログラムが終わった後、しばらくしてスマホのトークアプリを見たんです。そうしたら、もう自分でも思っていないくらい友達が増えてて!とても驚きました。実際には会っていないけどつながっている、と実感しました。

スカラーになって持つことができたつながりには本当に感謝しか勝たん。「夏季プログラムで終わりじゃない、始まりなんだ。」という先輩の言葉を胸に、今後も邁進していきます。





正野 寛一郎

Masano Kanichiro

埼玉県／高校生

自分の障害と良い関わりを

DO-IT プログラムに参加して一番感じたこと、一言でいうと「求めよ、配慮を！」である。

私はあまり人に配慮というものを依頼せずに、できるだけ自分だけの力で頑張ろうとしていた。例えば学校のレポートを代筆やタイピング等を、時間をかけながらも誰の力も借りず行動するといったようなものだ。これは健常者との差を作ってしまう、いわゆる「特別扱い」を受けるような感覚に陥り好ましくないものとも思っていたところとも関係する。加えて健常者が当たり前のように自分で出来ていることを自分ができないということが悔しく、自分を自分で受け入れられなかったこともある。どうしても介助が必要なことだけは人に頼んできたが、それも家族や友人、先生、支援員等の近い関係の人にのみに限ってきた。その結果、時々体を壊し、自分で活動することが厳しい状態に陥った時もあった。特にその疲労が高校生になって顕著に出始めていた。

しかし夏季プログラムを受け、私の心に大きな変化が生じた。今までの自分はあまりに配慮を求めることに消極的だったことに気づかされたのだ。もっと多くの人に対して配慮を求めているのだ、もっとたくさん頼っていいのだ、もっと依存先を増やせばいいのだ、という思考に変化したのである。このように私の考え方が変化したのはプログラム内でのある人の言葉がきっかけだ。それは「使えるものはすべて使う」という一言だ。軽い感じでサラッと saying していたものだったが、今までの私にはこの考え方はなかった。使えるものでも使いた

くない自分がいたのかもしれない。いわゆる「特別扱い」されているというような罪悪感のようなものもあったかもしれない。それらを全て払拭し打ち破った衝撃的な一言だった。ある意味では自分の障害をもっと深いところで受け入れられたということかもしれない。

「合理的配慮」も「特別扱い」ではなく自分に必要な時には堂々と主張し、活用していこうという考えに変わった。とは言いつつも自分で容易にできることへ配慮を求めるのではなく、全く自分ではできないこと、テスト時等の自分の体がきつくなりそうな時、体調を崩しそうになった時には、より強く配慮を求めることとしたい。配慮というものは自分のできないことに負けを認め「特別扱い」を受けるのではなく、健常者と同等の状態、平等の実現を確保する手段に過ぎないのだ。例えば、試験で代筆や試験時間の延長等は一見特別扱いのように見えたとしても私にとっては健常者と同等の水準を作りだすだけに過ぎず、平等確保のための手段に過ぎないのである。こうして、初めて自分の真の実力を発揮できる状態となるのだ。

プログラムを受けてから私は困難なことについては積極的に配慮を求めているこうと考えるに至った。まずクラスメイトと協議し、私が移動しやすいように学校の教室の机の配置を大胆かつ抜本的に変えてもらい、一つの懸案を解決した。このように配慮をしてもらうべき時は積極的に配慮を求め、自分の障害と良い関わりを保ちつつ楽しく生きやすい人生にしていきたいと思う。

森田 康生

Morita Kosei
愛知県／高校生



不安が少しずつ軽くなっていった

【もらった意見は、ログデータで記録】僕は夏季プログラムの合理的配慮で「授業中に漢文や古文の読み上げを録音させてもらいたい」と求めた。その根拠としては、読み飛ばしをしたり歴史的仮名遣いの判読が難しいからだ。プログラムでは、多数の意見をもらった。「授業中のノートテイクには困っていないか?」「必要なのは音声データのみでいいのか?」。もらった意見に答えようとしたが、その時は自分の考えをまとめることができなかつたので「テキストデータは自分で作成します」と回答するのが精一杯だった。せめてアドバイスは忘れないように記録したかったのでUDトークのログデータから保存した。

夏季プログラム後、マインドマップで整理しながら考えた結果、音声データを授業時間内で録音すると雑音や先生のタイミングの問題があること、書き下し文はテキストデータを作ってもらわなければならないことがわかってきた。

【時間がかかること＝体力の消耗】教科書には書き下し文がないので、音声教材制作団体「AccessReading」からテキストデータを作ることはできない。板書画像には書き下し文以外にも、活用や品詞、係り結びなどの解説情報が多い。僕は追視に困難があつてテキストデータ作成に長時間費やしていた。それは、勉強時間を確保したい自分のニーズとは全く逆の努力になっていた。夏季プログラムの最初の講義で、依存

先を増やすという話題があつたが、テキストデータを作るための依存先を増やすにはどうしたら良いか?これから先の課題も見つかった。

【自分の言葉で伝えることができた】僕は構音障がいのため、自分の言葉が相手に伝わりにくい。意見を言うときに、21スカラーやスタッフの皆さんが僕の言葉をキャッチしてくれたので安心感に繋がった。もう一つ、UDトークのおかげで言葉を出す時に感じていた不安が少しずつ軽くなっていった。UDトークはログデータで残してもらえたので、同時に複数のことができない僕にとっては後で振り返るための記録データとしてとても助かった。ミーティングで伝えきれなかつたことも、ログデータを見てもう一度考えることができた。

【仲間の笑顔】僕は毎年、報告書の中のスカラーが生き生きした表情で素敵だと思つていた。人は美味しいものを食べると幸せな表情になる。僕にとってDO-ITは美味しいプログラム工場だった。

*作成したマインドマップ





佐藤 殊菜

Sato Shuna

宮城県／高校生

勇気をくれた瞬間

私ははじめ「自分以外の障がいを持つ人たちとの関わりを持ち、その中で多様な障害に対する価値観や考え方を共有したい」「将来の自分に必要な知識や情報を学びたい」という思いからDO-ITのプログラムに応募した。

スカラーとしての活動が始まり、同期のスカラーたちの多様な立場から見た社会問題に関する思いや考え方を共有していく中で特に衝撃を受けたものがある。それは「自分から社会問題を変えていきたい」という思いやその活動をすでに行っている仲間がいたことである。私は、今まで自分なりに深く考えてきたつもりだったが、心の隅で少し諦めていた部分があったことに気付かされた。

「障がい」とは何だろうか？そう問われた際の周囲の返答も新鮮であった。「障がいとは、個性。誰もが持つ特有の性質に過ぎない」と考えていたし、納得もしていた。しかし、見えない壁を感じながらもその中で生じる不満や疑問を見ないふりをしている弱い自分がいたのである。だが「マイノリティとマジョリティ、壁はそもそも存在しない」という仲間の考えが私の今までの考えを正当化し、同時に勇気をくれた瞬間は今でも強く印象に残っている。社会で生活する様々な個性を持つ人の中で、少数派のほんの少し助けを必要とする特徴を持っている人の1つの呼び方として「障がい者」と言われているのに過ぎない。だから壁などそもそも存在しないし、みんな何ら変わらないのである。

また、私は「自立の対義語とは何だろう」という問いに悩まされた。「どんな人でも自分一人で独立することは不可能で、例えば一人暮らしの中でもインフラを利用して生活している。それと私たちが必要とする配慮とでは何が違うのだろうか？一般に健常者といわれる人たちも手助けを必要とする程度は様々である。それは私たち障がいを持つ人も同様である。「自立して一人暮らしをする」というのはどのような形であれ、誰かの助けを借り、その助けに依存して生活していくことである。つまり「自立」とは依存先を増やしていくということなのである。

障がいのある人の1つの課題とされていた「自立」とは、合理的配慮を求めることによって何の障壁もなく乗り越えられるものであったのだと理解したと同時に勇気づけられた。そして「合理的配慮」という言葉は、今までの私にとってあまり馴染みがなかった。そのため多少抵抗があった。しかし、合理的配慮とは特別扱いなどではなく、私たちが社会に進出していく中で足りない部分を補ってくれる一種のサービスであることに気づかされた。

私は今回参加した中で、初めに目標に掲げていたこととは比べ物にならないくらい貴重な経験や暖かく頼りがいのある仲間に出会えたことができた。また、私にも何かできないかと考えるようになった。多種多様な価値観に触れ、自分の殻を破ることができた。これからの生活の中で、今回得た知識や経験を活かして行きたい。



北名 美雨

Kitana Miu

広島県／大学生

障害を伝え良い結果が返って来たこと

私がDO-ITに参加して得られた一番大きな物は「障害開示が必ずしも自分の不利益に繋がる物ではない」事を体感できた事だ。

今までは文章を読む速度は計算や思考の時間で補えば良い等、常に背伸びをした状態にいる事がやりたいた事を奪われない為の最大の防御になると考えていた。視覚障害を隠していた状態ではできていた事でも、開示した途端に危ない・責任を持てないと止められた経験があった為「障害開示は相手に断る材料を与える事」だと思っていたからだ。

それを大きく変えたのが「合理的配慮を求める」プログラムだ。ここでは配慮を求めたい具体的な場面を1つ設定しプレゼンを行う。夏季プログラム本番では自分の事を初めて知る多様な立場の人へ、求める配慮を説明する為まず自分の困難から話す必要があった。自分の「できない」に焦点を当てた発表では先生方が「自分の力を精一杯発揮できる環境」「更に過ごしやすい為にプラスに必要な配慮の例や提案」を考えてくれた。

2次選考の面接ではスタッフさんに「自分にとって障害はコンプレックスの一つであり、弱みを伝えてまで開示するメリットはない」と話し「配慮と機会均等・権利擁護の両立は不可能」だと信じていた私が、プログラムを通して「苦手な事を伝えた事で更に参加しやすい環境を整えようとしてくれる人がいる」と知れた。この経験は開示に対して前向きにさせ、2つの成功体験も得られた。

1つ目は、夏季プログラム中の雨の日に画面オフでの参加を認められた事だ。「不調で今できない事がある」というのは伝えるリスクが最も大きいと思っていた類の物だったが、寧ろ伝えた事で普段よりも講義内容に集中できた。

2つ目は、夏季プログラム終了後の大学の講義で最高成績「秀」を取れた事だ。私には視覚障害（指数弁）とASD・ADHDの診断が下りているが、発達障害に関してはほとんど開示していなかった。思う様に成績が取れない事もあったが、それが自分の限界なのだと諦めていた。マルチタスクが苦手な講義中にメモが取れない事が影響していると考え交渉したところ個別に動画を貰え、録画を止めながら再度受講できた事で成績向上に繋がった。開示を拒んでいた体調不良・発達障害を伝え良い結果が返って来た事は今後も開示してみようと思わせてくれた。

将来特別支援教育の研究者を目指している私にとって、DO-ITでは多様なニーズのある方に出会う事が目標の1つであったが、それだけでなく自分自身の学習環境の改善について多くの事を学べた。4日間で大きく成長できたと感じているが、本当の挑戦はこれからになるだろう。残りの大学生活・教育実習・院試等で配慮を依頼する際にはDO-ITで得た事を生かしていきたい。



清田 みお
Kiyota Mio
大分県 / 高校生

圧倒的に多くの人と関わる

私は現在高校を休学しており、高卒認定試験を利用して大学受験をする予定です。周りに同じような状況の人はおらず、何から手を付けたらいいのかも全く分からず焦りばかりが募っていました。そんな中、受験時の配慮申請を想定したプログラムでは、先輩達から「リアル」な声を沢山いただきました。

先輩やスタッフからアドバイスを聞いて分かった事は「一人では分からない事が本当に沢山ある」という事です。私の配慮申請の場合、書類に記載する正式な診断名が不足していた事、出願前申請の存在等でした。これによって私は自分の計画が穴だらけだったという事に気づきました。夏季プログラムに参加していなかったら、私は今頃無事に申請を終えることができていなかったと思います。

色々な立場の人と話ができるようになったのもとても心強いことです。以前特別聴講生として参加した時と比べて、圧倒的に多くの人と関わる事ができました。その中には私と同じような立場から役立つアドバイスをくださる人もいれば、全く違う立場から新しい考え方を教えてくれる人もいました。一緒に沢山話し合ってくれる21スカラーの仲間もとても大切です。今すべきことが見えてきて、プログラム翌日から早速新しくアクションを起こすことができました。

得られた情報は目の前の事だけに関してではありません。私が夏季プログラムに参加して特に印象的だった考え方があります。それは「障害(障壁)は個人と社会の間にある」という考え方です。私は障害の医学モデルと社会モデルという考え方を聞いた事がありましたが、どちらにも完

*自作イラスト：「障壁は個人と社会の間にある」という考え方



全に同意する事はできませんでした。個人か社会のどちらか一方が悪いと言っているかのようでピンと来なかったのです。しかし私は社会モデルを完全には理解していませんでした。例えば私はASDを持っており「空気を読むことが苦手」という特性があります。この場合、障害は一体どこにあるのでしょうか。個人の中にあると考えると、私の脳に障害がある事になります。しかし私一人ではこの障害は生じません。社会にあると考えると、空気を読む事を求める社会に障害がある事になります。しかし、空気を読む事が得意な人にとって障害は生じません。つまり障害というのは、個人と社会のどちらかに原因があるのではなく、相互関係の中で噛み合わせにズレが生じた時に起こるのです。これが「障壁は個人と社会の間にある」という考え方です(自作イラスト作成)。私はこの考え方に出会った時、目から鱗が落ちるような思いがしました。そして社会モデルという言葉より深い意味で理解できたと感じました。

プログラムの最終日「私達の活動は今からがスタートだ」という言葉を身を持って感じていました。「まだまだ話足りない!」という思いでいっぱい「これから」に繋がっていく感覚が自分の中ではっきり感じられています。



楠本 太一

Kusumoto Taichi

東京都／高校生

いろいろな人がいて広い

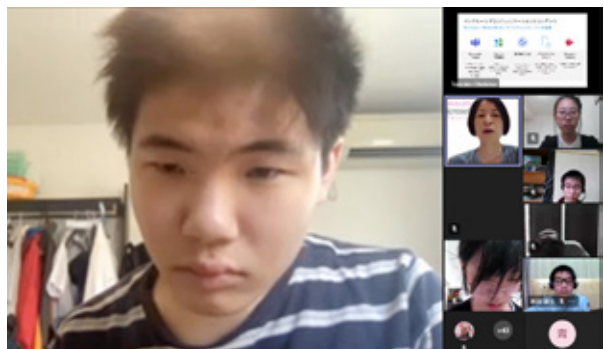
DO-IT Japanに応募したきっかけは、前の年に特別聴講生をやり、知り合いのスカラーの人から話を聞き、スカラーにさらに興味が増したからだ。今回のプログラムで学んだかったことは、社会や会社などが、どれくらい障害者に配慮しているかだ。自分は発達障害があり、字を読んだり書くことが苦手であったり聴覚過敏なので、まだ先のことだがうまく働ける自信がなかった。またいろいろなところで自分は別の障害を持った人と会うので、より一層社会などがどれくらい配慮しているか気になっていた。

プログラムを通してわかったことは、自分が思っているよりも会社が助けてくれることや、社会というよりも世界で障害者のニーズに合ったサービスをしているということだ。マイクロソフトでは、Microsoft Teamsなどのサービスにライブ字幕や操作の簡単設定などを付けており、利用しやすくなっている。しかし、世界にいる障害者の数が自分の想像より多いこと、その中で自分たちに必要なものを入手できている人が少ないことに課題を感じた。ただ、今のコロナ禍でリモートを取り入れたりと少しずつ働き方が多様化しており、障害者がさらに働きやすい社会になりつつあるとも感じた。

話は変わるが学習障害を持っている自分は、中学で配慮を求めてもなかなか理解してもらえず苦労した。知り合いの同じ障害を持つ人の多くが似た経験をしていて、その経験では学校や入試などでの障害者への配慮などはあまり進んでいないと思うところが多くあ

り、その点も変わってほしいとより強く思っていた。DO-ITで学んだことを言い換えてみれば、アクセシビリティを考慮しないことは入学した生徒や入学を希望する学生に対し、あなたはここでは勉強できませんと言っているようなものだ。障害がなければ、受験で目標にしている学校に入れたり他の生徒と同じように学べる能力を持っている人も多くいるのに、学校に障害を理解されず苦労してしまうのはあってはならない。だから小学校から高校の先生たちは、障害についての理解を深めてほしいと思う。

自分としては、他のスカラーとどういうところで苦労していること、困っていることを話しあいたい。今、自分はかなり障害に対して関心があり、今のうちに知識などを増やして、何か役に立つことを考えたいと思っている。夏のプログラムでは、2021年度のスカラーだけでもいろいろな特徴を持つスカラーと繋がれ話せたのはいい経験になった。DO-ITは、いろいろな人がいて広いが、簡単にいろいろな人と触れられるので、自分の世界を広げていきたいと思う。



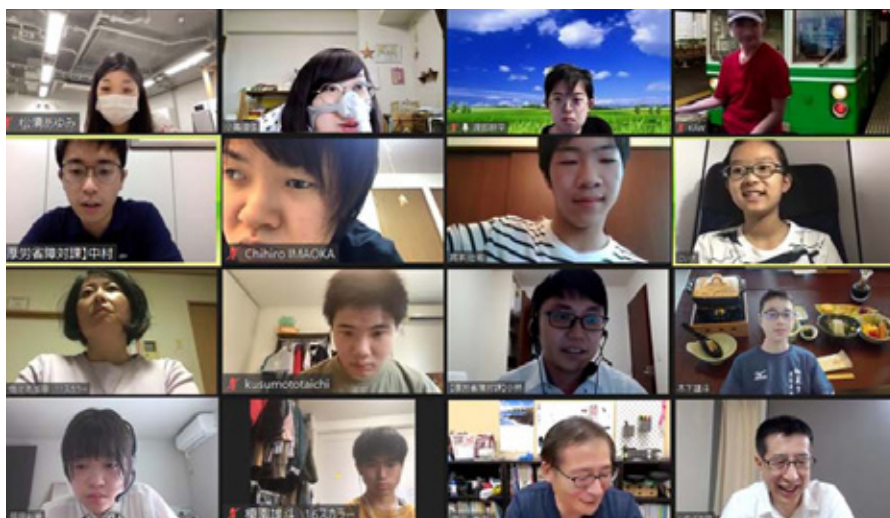
1-2 夏季プログラム聴講生

スカラープログラムに応募し、面接まで進んだ生徒・学生の中から「夏季プログラム聴講生の選考」を行っています。夏季プログラム聴講生は、夏季プログラムを一部聴講することができます。今年は5名が「夏季プログラム4日目(コンカレントセミナー)」に参加しました。

夏季プログラム4日目：コンカレントセミナー 参加

[8月12日(木)]

- 🕒 集合・オープニング
8:30
- 📄 コレカントセミナー A 参加
9:00
- 📄 コレカントセミナー B 参加
11:00
- 🗨️ ランチトーク
12:30
- 📄 コレカントセミナー C 参加
13:30
- 🕒 振り返り・感想共有
15:00



コンカレントセミナーに参加し、スカラーを始め、様々な人と出会い、多様な価値観にふれる体験をしました。プログラムの空き時間には、選考された夏季プログラム聴講生、DO-IT アドバイザーやスタッフが集まり、プログラムの感想や質問等、意見交換をしました。

[夏季プログラム聴講生の感想]



鯉江 那七
Koie Nana
中学生

いろいろな価値観の人に出会いました。社会は障害者をひとまとめにして、誰かの意見を全体の意見にしたがるけれど、皆沢山のことを考えて、一人一人別々の考えを持っていました。そんな人達を見ていて、私も自分だけの意見を持ちたいと思いました。なので今回参加したときも自分の意見を積極的に出すことを努力しました。

今の自分の実力では上手く伝えられないことも多く、大変でしたが、自分の意見を伝えられてとても楽しかったです。



木下 雄斗
Kinoshita Yuto
中学生

自分の使いやすいものに工夫する、これが僕の目指していることだ。教科書には、紙のものもあるし、デジタルのものもある。これを自分のやりやすいものにしていきたい。デジタル教科書にはいろいろな機能があり読み上げ機能などがあつた。

セミナーのおかげで選択肢の幅が広がったと思う。教科書だけでなく、ノートをとる道具も他の人と、違っていいので自分の一番使いやすいものを見つけていきたい。道具の選択肢の幅も具体的に広がったし未来の選択肢の幅も広げることができたのだと思う。

1-3 特別聴講生プログラム

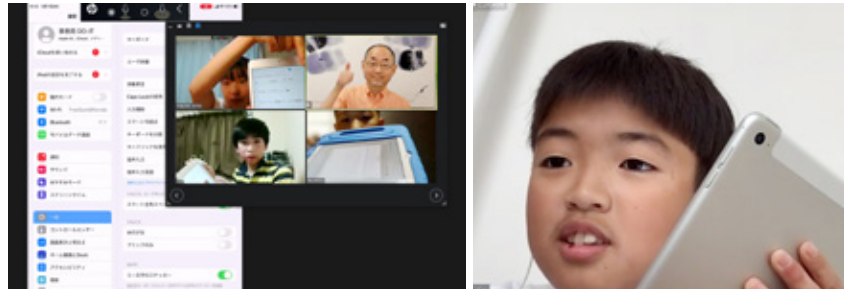
テクノロジーコース 10 名、ダイバーシティコース 4 名 (計 14 名) が選抜され、それぞれのコースにオンラインで参加しました。特別聴講生プログラムは、学びの芽を育てることを目的としています。似た困難がある学年が近い仲間や先輩スカラーと出会い、意見交換を通じながら、多様な考えや方法にふれる時間を過ごしました。

共催
プログラム

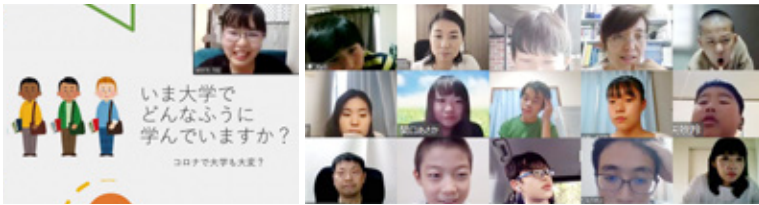
テクノロジーコース：テクノロジーを使った多様な学び方を体験する [8月11日(水)]

●テクノロジーセッション「テクノロジーと自分の好きな学び方」

7月からオンラインでプリプログラムが行われ、貸与された iPad を触りながら基本的な使い方と学習に便利な機能を体験しました。プリントを iPad に取り込んで書き込む方法や音声読み上げの方法などを知り、自分に必要な機能を選び試していく時間になりました。



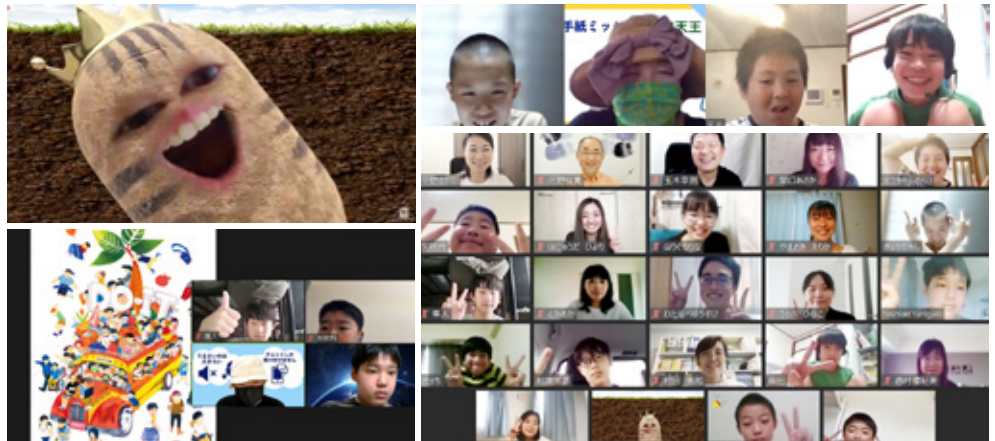
●先輩と話そう!「ちょっと先の未来のこと、自分との付き合い方」



先輩スカラー達の経験を聞きながら、自由に意見交換する時間。どのように自分の障害と付き合ってきたの? 学校時代を過ごしてきたの? どんな配慮を求めてきたの? 特別聴講生は、質問を通じながら自分のことを見つめる時間を過ごしました。

●先端研クエスト 2021「目指せ!テクノロジーマスター」

楽しい仲間との時間を邪魔する者たちが現れ、ある宝物を奪われてしまった。iPadがあれば、読むことも書くことも怖くない! 特別聴講生たちは、先輩スカラーや大学生チューターと共にこれまでに習った iPad の技術を駆使して、いくつもの謎解きに挑みました。



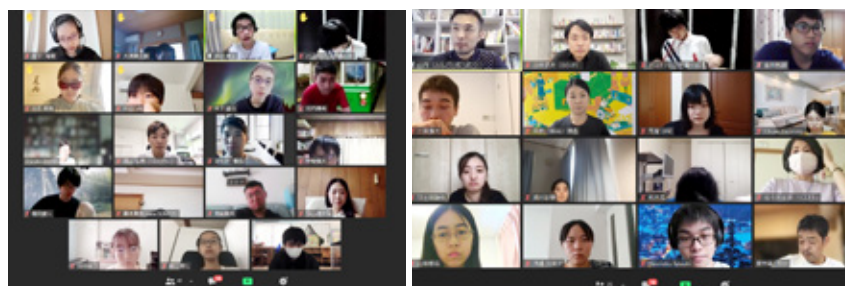
ダイバーシティコース：多様な価値観にふれる

[8月12日(木)]

コンカレントセミナーへの参加

詳細は P14-15

スカラーと共にコンカレントセミナーに参加する特別聴講生ダイバーシティコース。セミナー内では、スカラーとともに積極的に発言し、障害に対する考え方や価値観の多様性について考えを深めました。



プログラムに参加した特別聴講生の感想

[テクノロジーコース]

DO-ITに参加できてとても良かったです。Zoomでの会議もいろんな話がきけて本当に楽しかったです。

一つ目の理由は、いろんな地方からきたみんなと話せたからです。二つ目の理由は、スカラーの人たちの体験談を聞けたからです。いろいろためになる話ばかりだったのでありがたかったです。三つ目の理由は、iPadなどのとても役立つ電子機器の使い方を教えてもらえたことです。

iPadなどを使って勉強などをしていると聞いたので、そんな使い道があったのだなと思いました。

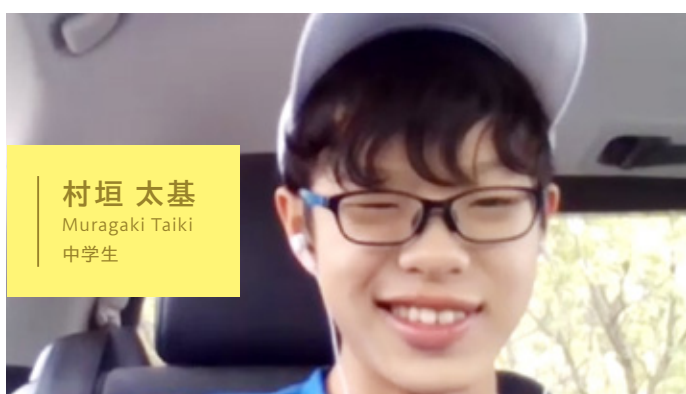


田中 隼人
Tanaka Hayato
小学生

この期間に、僕はすごく貴重な体験をしました。僕の人生に役立つような話がありました。

例えば、読んでくれる機能や、拡大、漢字を調べるときに便利なアプリ、計算などです。そして、KoiKoiパーティです。最初は、100人ぐらいいました。その後、10人に分かれてきましたが、あまりしゃべれなかったのが反省です。

この数日は僕の人生に大きな影響をあたえてくれました。ありがとうございました。



村垣 太基
Muragaki Taiki
中学生

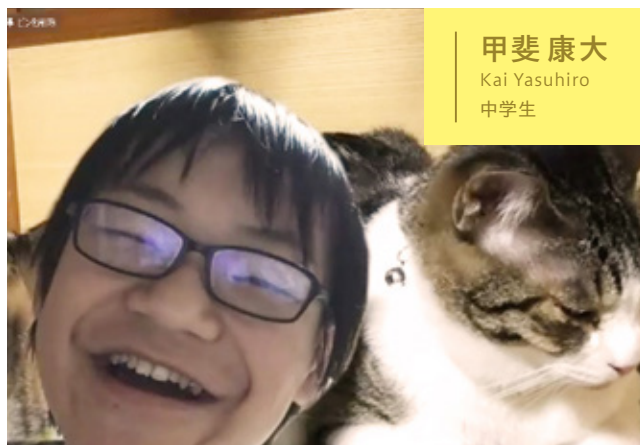
[ダイバーシティコース]



金井 哲朗
Kanai Tetsuro
中学生

僕は、他人と目的のない話をするのが苦手だったり、文字を書くことが苦手で解決したいと思っていました。DO-ITの事を聞いたときは、難しい講義を聴く場所かと思い敬遠していましたが、活動報告書などを見ていくうちに、議論をして新たな意見を生み出す場なのだと思い参加しました。

当日は非常に様々な事を学びました。一番記憶に残っているのは、すべての参加者が集まって話す koikoi パーティーで、好きなものについて話したことです。色々な人の話を聞くと好きなものも全く違い多様性がありました。会話をするとお互い似たような悩みを持っていることがわかり、打ち解けることができました。



甲斐 康大
Kai Yasuhiro
中学生

セミナー1では、最新技術の音声教材やデジタル教科書などを知って、これをうまく使えたら学校で過ごしやすくなると思いました。セミナー2では、先生や大人からの「これできるから、あれもできるよね」と強要される人が、自分以外にもいると知りました。見えない障害や病気がある人はいるから、そういうことを先生等にわかってほしいと思いました。セミナー3では、僕は自分の持病を「この人なら信頼できる」とか「この人には伝えといた方が良い」と思う人にカミングアウトしています。でも、先生のタイミングでカミングアウトされたという人もいたので、そうゆう配慮も学校では考えて欲しいなと思いました。

1-4 夏季プログラム後に行われるスカラープログラム

スカラーは、テクノロジーを活用し、年間を通じて開催されるプログラムに参加します。ディスアビリティ、ソーシャルインクルージョン等をテーマとしたオンラインミーティングでの意見交換やメンタリング、各地域にいるスカラーや関係者との情報交換、イベントやプログラムへの参加を通じ、多様な価値観にふれる機会を得ています。

DO-ITには、様々なテクノロジーの専門家や特別支援の教育専門家、社会学の専門家等が参加しています。スカラーは、専門的な質問を行ったり進学や合理的配慮を得ていく際の様々な情報提供を受けながら、自己実現に向けて活動しています。

メーリングリストの活用



海外・全国にいるスカラー、アドバイザー、スタッフが繋がり、やりとりを行っています。メーリングリストを活用し、学校に配慮の説明するときのアドバイスをしあったり、介助を伴った一人暮らしについての情報を求めたり等、自由に意見・情報交換を行っています。

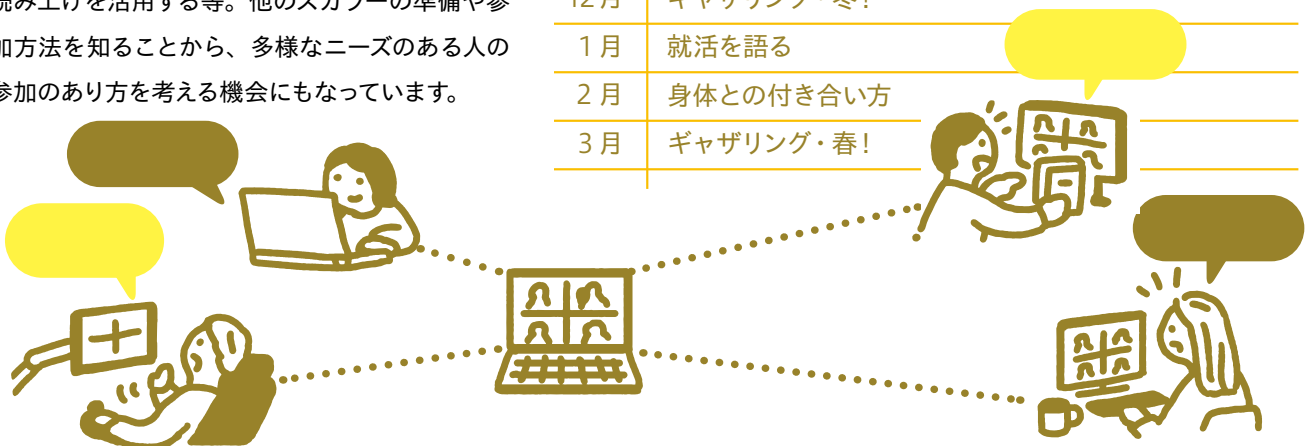
オンラインミーティングの開催・参加

主に Zoom を活用し、各月にテーマを設けて開催しています。スカラーそれぞれが自分の意見を発信し、活発な意見交換を行っています(今年のテーマは、右図を参照)。スカラーが話題提供者となり、自分の考えや経験を伝える時間も行われました。

オンラインミーティングは、多様性を知る機会にも繋がっています。口頭での会話が難しい場合はチャットを利用する、聞くことや話された内容を頭の中で整理することが難しい場合は会話を可視化させる、見ることや読むことが難しい場合は読み上げを活用する等。他のスカラーの準備や参加方法を知ることから、多様なニーズのある人の参加のあり方を考える機会にもなっています。

2021年度：オンラインミーティング・ギャザリングのテーマ

4月	近況共有会
5月	スカラー企画「福祉」を語る
6月	ギャザリング・夏!
7月	(過年度スカラー対象) マインドセット・夏季プログラム
8月	振り返り・夏季プログラム
9月	ようこそ 2021 スカラー!
10月	雇用を考える「DO-IT のジョブシャドウイングやインターンシップの実践から」※ゲスト出演
11月	自分らしい学び方・合理的配慮
12月	ギャザリング・冬!
1月	就活を語る
2月	身体との付き合い方
3月	ギャザリング・春!



ギャザリングの開催・参加

毎年スカラーは増えていき、所属も出身地も様々なため、スカラーがお互いを知る機会としてギャザリングを開催しています。今年も、DO-IT Japan事務局でインターンをしているインターン生が主体となり、企画が立ち上げられました。その時の関心事や、共に体験したいものをトピックとして、オンラインで語り合う時間を過ごしました。



イベントの開催・参加



今年も、6月に開催された「先端研キャンパス公開」にて、オンラインでイベントを企画・実施、11月に開催された「国際福祉機器展」への現地参加を通して、意見交換する活動を行いました。各人が参加したイベントの情報を、メーリングリストで共有して意見交換することも行われました。

個別相談

個々のスカラーが直面している問題や困難の解決に関わる相談を、共に考える機会として個別相談を行っています。DO-IT Japanは、スカラーが困っていることを「助ける」支援を行っていません。過去に前例はないが自分にとって必要不可欠な配慮を、学校、高等教育機関、大学入試センター等に求める活動に対し、DO-IT Japanはスカラーから希望や考えを聞き、「セルフ・アドボカシー(自己権利擁護：自分にある権利を主張し、自分が参加する活動に対し、必要な配慮を説明し求めていくこと)」が実現するように、必要な情報やアセスメントの実施を提供しています。



海外リーダーシップ研修



毎年、大学生を対象として選抜が行われ、参加者を決定しています。現在、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染状況により、活動を延期としています。2021年2月開催の国際シンポジウムでは、選抜者はオンラインで発表を行い、意見交換を行いました。

2 パルプログラム

パルプログラムは、情報発信を目的とした登録型プログラムです。障害のある本人とその保護者が登録できます。毎月末に、各月のテーマに沿った、パル向けのメールマガジンの発行を行っています。年末には、話題提供と意見交換の場として、パルセミナーを開催しています。幅広く情報を届けると共に、ロールモデルと出会う機会として活動を行っています。

登録者の情報

総計：3,739名
(2021年12月)

海外も含む全国から登録がありました。幼児から成人まで(本人とその保護者)、幅広い年齢層で登録がありました。



パルメールマガジンの発行



毎月末、お知らせと共に、右図のテーマに沿って、DO-ITに寄せられる質問とその回答、事例、Technology Tips!(テクノロジー情報)を記載したメールマガジンを発行しました。メールマガジンには、DO-ITに協力いただいている各大学・団体の教職員・スタッフより、自身の専門性に沿った話題提供と読者へのメッセージをコラムとして掲載しました。

2021年度 パルメールマガジンのテーマ

4月	生活をエンジョイする
5月	自分にあった学習環境
6月	大学を知ろう
7月	自分の進路
8月	始業前にお届けしたい情報
9月	体調管理
10月	防災・災害・避難
11月	医療との付き合い方
12月	生活の工夫
1月	食べる!
2月	就学・進学準備
3月	雇用を考える

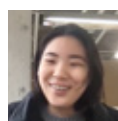


9月のメールマガジン内容(参考)
【今月のテーマ：体調管理】

- <1> お知らせ
 - 一般公開シンポジウム 2021、パルセミナー 2021 開催日決定
 - AccessReading オンライン研修会開催
 - 音声教材普及推進会議 -R3. 会議配布資料・説明動画掲載
- <2> 事例
 - 「身体との付き合い方：行動の調整」
- <3> Q & A
 - Q：勉強する時に、姿勢が崩れたりすぐ疲れちゃって困るんです。
- <4> コラム
 - 「自己決定 VS パターンリズム」
- <5> Technology Tips!
 - 「学習時の姿勢を楽にするツール類」

パルセミナーの開催

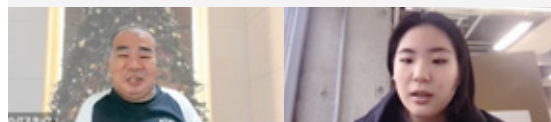
パルセミナーは「自分にあった学び方と先輩との出会い」がテーマ。前半は、DO-ITスタッフより国内の初等中等教育での合理的配慮に向けた体制整備の例や、学校・自治体の活動例、DO-ITでよく紹介するテクノロジーを活用した学び方の例を話題提供しました。後半は、大学生になったスカラーが登壇し、自分の学び方や生活の仕方について話題提供し、参加者と意見交換しました。セミナーには、パルプログラム登録者の小学生から成人の方、またその保護者の方と、多くの方にご参加いただきました。



酒井彩華
2018 スカラー

DO-ITで紹介するテクノロジーを
活用した学び方の例

DO-IT Japan



2021年12月18日(土)開催

パルプログラム登録



登録は DO-IT Japan ウェブサイトより常時可能です。(インターネット上で登録できます)

ホームページへアクセス!
← <http://doit-japan.org/>

登録フォームに
参加者情報を登録

登録したアドレスに
完了メールが届けば完了



3

DO-IT Japan の様々な活動

DO-IT Japanの活動を多くの方へ知ってもらうため、ニュースレターの発行、説明会や一般公開シンポジウムを開催しています。また、新しいインターンシップのあり方として、共催会社とプログラムを実施しました。取り上げられたDO-IT Japan関連のメディア情報を紹介します。

ニュースレターの発行

DO-IT Japanの活動をお知らせするニュースレターを、毎月末配信しています。DO-IT Japanに関心をお持ちの全ての方が登録できます。DO-ITからのお知らせとTechnology Tips!(テクノロジー情報)をお届けしています。ウェブサイトから常時登録することができ、約2,000人の登録をいただいています。

こちらから登録
いただけます
→



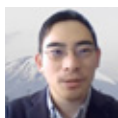
DO-IT Japan 説明会の実施

DO-IT Japanの活動やスカラープログラムに関心がある方へ向け説明会を開催しました。今年選抜されたスカラーと、選抜されて数年たったスカラーが登壇し、スカラープログラムに参加した動機やプログラムに参加して感じたこと、その後の生活や学習の変化、参加者へのメッセージが語られました。その後、参加者からの質問に対し、意見交換する時間が行われました。

※2022年は3月26日(土) オンライン開催予定



荒屋 沙紀
2020 スカラー



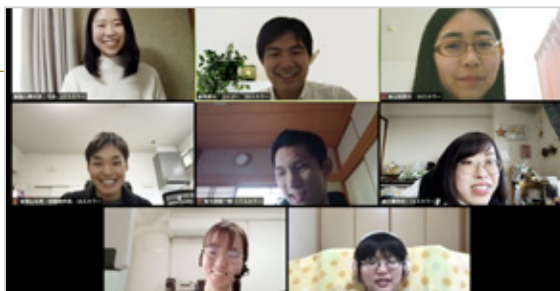
馬場 春樹
2012 スカラー



2021年3月25日(木) 開催

アウトリーチ部の活動

障害のある児童生徒が、より良い環境で学びに参加できるように、児童生徒に関わる先生たちの「困った」「どうしたらいいの?」に寄り添い、スカラー(私たち)とともに考え、アクションを起こせるようなきっかけとなることを目標に活動しています。先端研キャンパス公開2021年で、イベントを企画し、参加者と意見交換しました。



メディア・書籍の紹介 (2020年4月~2021年12月) ※一部抜粋

●メディア

2021年4月14日 内閣府国家戦略特区ウェブサイト/
特区対談#07「誰もが活躍できる街とは何か 東京都障害者雇用を促進する仕組みづくり」

2021年5月18日 日本経済新聞 / 「中高段階から産学官で支援を」(27面 教育)

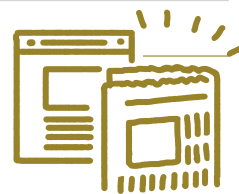
2021年11月9日 日本財団ジャーナル / 「自分らしい選択ができる」社会に。DO-IT Japanが活動を通じて障害のある若者に伝えたいこと

2021年11月11日 日本財団ジャーナル / 「『やりたいこと』への扉を自ら開く。障害のある若者の可能性を広げるプログラムで得たチカラ」

●書籍

株式会社 山川出版社 / 東京大学未来社会協創推進本部監修「東大 ×SDGs 先端知からみえてくる未来のカタチ」

株式会社学研教育みらい / 朝日新聞社「学びに凸凹のある子が輝く デジタル時代の教育支援ガイド」



インターンシッププログラム／P&G ジャパン

障害のある若者のキャリア移行と活躍をテーマに、社内に新しい働き方やキャリア作りを目指す P&G ジャパンの皆さんと共に、インターンシップを実施しました。DO-IT Japan がハブとなり、スカラーとの対話を重視したインターンシップを実施しました。

配属先：生産統括部 (Product Supply) (遠隔参加)
2021.8.17 ~ 2021.9.10
勤務期間：※月～金曜日、勤務時間 (4 時間/日)、有償
業務内容：サプライチェーンにおける出荷数や在庫数のデータを可視化・管理する既存ツールの改善 (Power BI を使用したレポーティング開発)



脇山 輝衣菜
Wakiyama Kiina
2017 スカラー

テーマ

キャリア移行とそこでの成功で求められることは何でしょうか？障害のある学生個人が強みと得意、専門性を持つことはもちろんですが、企業と部署において何が求められているのかを、企業側もはっきりさせて、学生と対話し、「どうすれば持てる力を発揮できるか？」をともに試行錯誤することが必要です。P&G ジャパンの皆さんとのインターンシップでは、まず各部署でインターンが参加するプロジェクトを定め、その業務内容とゴールをはっきりとさせた上で、1ヶ月間、プロジェクトに取り組みました。



平井 啓一郎
Hirai Keiichiro
P&G ジャパン
生産統括部



杉山 且真
Sugiyama Katsuma
P&G ジャパン
生産統括部

インターンシップ学生からのコメント

■ 動機・目的

「多様なニーズを持つ社員にとって働きやすい環境をつくりたい」という受け入れ先の熱い想いが、障害のある学生が能力を最大限発揮できる環境を考えたいという私自身の目標と重なりました。他の社員との協働の中で多様な働き方・環境の工夫を共創することを目的に参加を決めました。統計が専門ではない私のこれまでの経験 (バックグラウンド) を、何かを生み出す化学変化の種として歓迎してくれたことに背中を押されました。

■ 準備

受け入れ先との事前の打ち合わせで、自分の障害や大学での専攻・様子を共有し、業務で使用する機器や業務時間、事前学習の内容を確認・決定しました。

■ 自宅での勤務の様子

会社・受け入れ先についての説明、業務に関する指示、社員とのミーティングは、オンラインでカメラをオンにした状態で参加をしました。自分一人で行う作業は、基本オフラインで進め、質問や伝言がある場合は、Microsoft Teams のチャットを使用しました。作業1時間+休憩1時間半を1セットとし、1日4セットのスケジュールを1ヶ月間行い、設定された業務を遂行しました。毎週金曜日に、1週間の振り返りとして、体調の変化や必要な配慮についてのヒアリングの時間があり、安心して業務に臨むことができました。

対話開始



マッチング

面接 (オンライン)

- ・業務内容の説明
- ・配慮事項の確認

採用

準備

(オンライン) 勤務期間

インターンシップ担当者からのコメント

高いスキルと意欲があるが、障害により就労に課題感を持つ学生を希望

- ・依頼業務の想定を実施に対する想定時間やスキルの確認
- ・学生へスキル確認
- ・面接、事務手続き (エントリー登録、適性検査、業務に必要な機材の準備等) の連絡

■ 準備内容について

- コロナ禍を鑑み、オンラインで業務等が完結できるように社員が日常的なコミュニケーション・資料共有に活用しているオンラインツールをインターンシップでもフル活用しました。
- 期待する職務に対して、数回にわたって事前打ち合わせを設けて相互確認を進めました。業務内容と実施想定時間、必要なスキルを言語化してこちらが期待する事項を共有するとともに、参加学生自身がインターンシップで必要とする配慮事項を確認し、対応について意見を交換しました。一連の打ち合わせで確認した内容を受けて、実施する業務の内容を最終化しました。
- インターンシップ期間中も対話を重視し、業務を順調に進められるような環境づくり (就労環境、コミュニケーション頻度・方法を含む) について、参加学生と受け入れ部署内、更にインターンシップ担当チームとも意見交換する対話時間を定期的に設けました。

多様なニーズを持つ社員の働き方や働く環境へのアイデアとして、障害のある学生としての自分自身の当事者性や頼もしいスカラーとの関わりから得られた知見を共有したことで、関わる社員の心に生じる変化や会社の文化の中に拓かれる新たな可能性を感じることができました。私自身の掲げる目標に関して率直な思いを表現できたこと、必要な配慮を得ることで与えられた業務で十分な力を発揮し、障害以上に能力を感じられる評価を得られたこと、全ては心理的安全性が保証された対話によって導かれた結果だと思えます。

今回のインターンシップを出発点とし、より多くの実践の積み重ねによって、障害のある学生にとっての選択肢の広がりや社会へのインパクトへつながっていくことを心から願っています。

(脇山 輝衣菜)

「インターンシップを終えて」

相互理解のための「対話」と明確な「職務」を軸とした協働を通じて、互いに成長していける可能性を強く感じた有益な体験でした。

チーム内に障がいのある人を迎えて密に働くのは初めてでしたが、日々の対話を経て障がいのとらえ方や多様性にも触れ、「障がいのある人と働く」ための一律のマニュアルはないことを体感しました。多様なニーズに合わせた環境づくりを実践し、適切な配慮・理解と相互リスペクトを深め、互いに異なる背景を持つ人として共に働いた実体験は、新たな働き方への大きな自信に繋がっています。これを元に、活躍の幅を広げるための工夫や選択肢づくり、そして異なる個人が「最高の自分」として活躍できる職場づくりを目指していきます。

(平井 啓一郎・杉山 且真)

一般公開シンポジウム「中学・高校のインクルーシブ教育を実現するには？」

日程：2021年12月5日(日)
13:00～17:00

会場：Zoomによるウェビナー配信

▶ 挨拶



神崎 亮平
東京大学
先端科学技術
研究センター
所長

ここ数年のDO-IT Japan一般公開シンポジウムでは、中等教育(中学校・高校)でのインクルーシブ教育を実現する上での障壁と、その解消をテーマとした議論を行っています。今年度のシンポジウムでは、第1部で文部科学省から現在の取り組みについてご紹介いただき、第2部ではDO-IT Japanスカラー(公立学校/私立学校/特別支援学校など、さまざまな学校で学んできた学習障害/視覚障害/肢体不自由/難病のある学生たち)と一緒に、中高の経験を振り返り、どのような取り組みが必要だったのかを議論しました。

話題提供・質疑応答「中高でインクルーシブに学ぶ生徒たちをどう支援するか？」



嶋田 孝次
文部科学省
初等中等教育局
特別支援教育課
課長補佐



辻 邦章
文部科学省
高等教育局
学生・留学生課
課長補佐

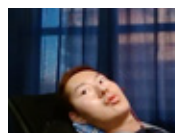
前半では、文部科学省でインクルーシブ教育システムの構築に向けた取り組みを担当する方々より、現在の施策としてどのような取り組みが行われているのかについて説明していただきました。

2016年の障害者差別解消法の施行の後、障害のある児童生徒がインクルーシブに学ぶ機会が拡大しています。大学では、障害のある生徒が入試の段階から配慮を受け、講義等でもインクルーシブに学ぶスタイルが一般化しつつあること。そして2021年に解された差別解消法が今後施行されると、私立の幼小中高校・大学でも合理的配慮の提供が義務化されることなどが話題として挙げられました。

ディスカッション「私たちの「中高のインクルーシブ教育」と今後への期待を語る」

ファシリテーター：近藤武夫(東大先端研・DO-IT Japan)

DO-IT Japan スカラー



慎 允翼
2013 スカラー



渡辺 陽
2017 スカラー



堀口 里奈
2017 スカラー



堀 遥歩
2018 スカラー



教育のインクルージョンに関する法整備が進む一方で、中等教育段階の学校教育現場には、障害のある生徒たちが参加する上での障壁が多く残されています。通常の学級での取り組みはもちろん、通級などの特別支援教育の充実や、入試や定期試験など成績評価での体制整備、卒業後の高等教育への進学支援、中高を卒業した後の就労への移行支援等、障害のある中高生に対して、通常の学校で行うべきことが多く残されています。

今年は、肢体不自由や視覚障害、発達障害、難病等の障害があり、私立・公立高校への進学、通常学級での教育を経験した高校生・大学生スカラー4名が、自らの経験と問題意識を語りました。ディスカッションには参加者や他のスカラーたちも参加し、今後のインクルーシブな学びへの期待について、会場全体で意見交換しました。

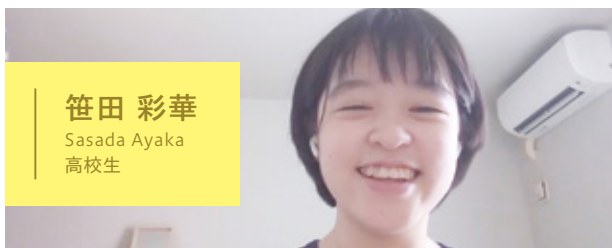
4

スカラーたちの活動

2年次スカラー（2020 スカラー）へ、スカラープログラムに参加して1年たって思うことをヒアリングしました。また、進学や就職等のライフイベントがあったスカラーへ、就学や就職、またそれに伴う配慮等の経験をインタビューしました。それぞれのストーリーの締めには、後輩へのメッセージ!ぜひご覧ください。

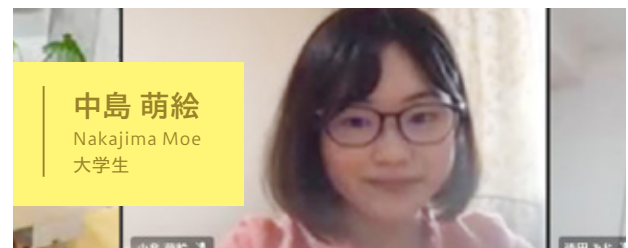
2年目のスカラーたちの姿 (2020年度スカラー)

二度目の夏季プログラムに参加して改めて気づくこと、受験や学校との交渉や親との付き合い方等をヒアリングしました。また大学生チューターとしての立場で夏季プログラムに参加を希望したスカラーへ、その経験から感じたことをヒアリングしました。

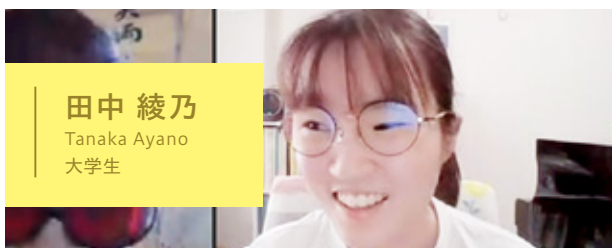


DO-ITに参加してから、自分が必ずしもみんなと同じである必要はないんだと思えるようになり、「自分のやりたいこと」に正直になれました。受験校選びの際も、自分が欲しい配慮をはっきりと伝えることができています。去年の私だったら、特別扱いが嫌だという一心で入学まではそのような話を避けていたかもしれません。

今回の講義では、以前と比べてより具体的な行動を考えられました。来年の大学一年生の自分に必要なことを明確にできる有意義な時間でした。久しぶりにDO-ITの大勢の仲間に会い、濃い話をしていく中でやっぱり困ったらDO-ITの仲間を頼ろうと思えましたし、いつかみんなと直接会いたいという願望が再燃しました!



この1年は、障害と就労を深く考える時間になった。具体的な行動をとる中で、障害が社会で働くにあたり大きな障壁になることを実感した。例えば、コロナ禍でのオンライン選考がある。自分の障害を相手に伝わる形で説明する困難さを感じた。実際に自身の障害を知ってもらう対話の機会を設けることで解決したがやはり障害によって思い通りに進まないことにより精神的に苦しかった。そうした際に私が頼ったのは、DO-ITで出会ったスカラーや事務局だった。次に進む切り替えを行うことができた。自分より少し先を歩む先輩たちがいる心強さを感じた。次は自身の経験が少しでも役に立つと良いと考えている。人との繋がりの大切さを実感した1年であった。



2年次スカラーとして、また大学生チューターとして参加させていただきました。最も印象に残ったのは、新規スカラーとの出会いです。私と同じように視覚障害のあるスカラーがいたため、親近感を覚えて交流することがありました。困っていることなどを相談されたときに、私ならこうするという意見が浮かぶことがあったのですが、それが正解というわけではないため、伝え方が難しいと感じました。

スカラーが自分自身で考えたり行動したりするきっかけになるような言葉かけになっているだろうか、意見を押し付けてはいないだろうかと迷いながらも自分の経験を伝えることができてうれしい気持ちもありました。伝える難しさを楽しみながら、スカラー同士の交流を大切に積み重ねていきたいと思っています。



今年から大学生になりバスと電動車椅子を利用し芸術大学に通っている。自分から相談に行けば先生たちは喜んで協力してくれるのでオンライン授業に字幕をつけてもらったり、対面では学生ノートテイクが助けてくれたり入学前の予想よりも快適に授業を受けることができています。芸大だからか面白い人ばかりで真っ赤な髪の学生や、忌野清志郎の歌詞に出てくるような先生がいてとても楽しい。

この約一年の間に直接であれ画面越しであれたくさんの人に出会いそれぞれの価値観に触れ、多様な考えを吸収した。それらは僕の元々の価値観、感情、信念と合流し今も混沌と渦巻いている。何を学び、何を選択しどこへ行こうとするのか僕はこの渦の中へ何度も飛び込み自分との対話を続けていかなければならない。

インタビュー：進学・就職したスカラーたち

「自分に合う学び方で学ぶ」

小中学校の学習との付き合い方と
高校選択・学校生活についてインタビューしました



廣瀬 奏

Hirose Sou
2018スカラー／高校生

自己紹介をお願いします

現在 17 歳で、高校は海外の高卒資格がとれる通信制のインターナショナル・スクールに通っています。

高校進学前の学習について聞かせてください

自分は読み書きの苦手さと過集中があります。色弱もあるのでたまに色弱補助のメガネを付けたりしてます。

中学に入って学年が上がるごとにテストの文字が多くなり、だんだん成績が下がってきました。宿題は長い時間かけて努力してました。しかし、読み書きで覚えようとした勉強がなかなか身に付かず、複雑な気持ちが進み、通学は時々行く程度になり、次第には学校に行かなくなりました。その時期にやっと LD の診断を受けました。診断結果が出て自分が LD だとわかった時は、「やっぱり LD だったんだ〜」とわかって安心したのを覚えています。そこから自分独自の家庭学習が始まりました。結果この学習方法は、自分に合ってたと思います。

その後の学校では、通級を利用してました。個別でテスト受ける、数学はフォント変えてもらう等の配慮を受けました。地方ということもあり、パソコンを学校に持っていくとまでは踏み切れなかったです。その代わりに家で積極的に使っていました。

進学先はどのように決めたのですか？

中学校入学して間もない頃は内申点を気にしていたけど、自分で勉強する時間をとったり、パソコンの読み上げを使った勉強方法を知って、中学 3 年生の時には内申点も気にしなくなりました。

高校は通信制と決めて、進学先をたくさん探しました。現地体験もして自分にあっていいる高校を選びました。それが今通ってる学校です。ここは授業が無くて、自分で自分の目的に合わせた学習計画をたてて学習します。先生はコーチという形でサポートをしてくれます。自分はそれがいいなと思って進学しました。難しいこともあるけれど、毎日活動することが勉強に繋がるので面白いです。

高校の学習の様子を教えてください

高校では自分のペースで学習しています。手書きの物を少なくしたり、タイピングやスクリーンショットを使う、読み上げ機能で文書の読み上げ、映画を見て言語を覚えること等で読み書きの対応をしています。読み書きが苦手なのは、学校に入学時に伝えました。

高校生活はいかがですか？

高校に入ってたくさんの自分がやりたいことが探せました。趣味を伸ばしたり、嫌いだった科目も、もう一度挑戦してみても、その勉強の楽しさを知ることができたりと充実した学生生活を送っています。また、アルバイトをやったり「オシャレな半纏を作って販売してみたい」という自分の好奇心を単位に取り入れて、1 から全て取り組んでみる等、自分がやりたいことを単位という形で取り組めるのはこの高校のいいところだと思います。今年で 2 年生になりますが、卒業単位を取り終えたので卒業します。高卒認定試験を受けて、大学受験しようと思っています。

後輩へメッセージをどうぞ！

「全力で頑張る」ということだけが、物事の解決方法ではないと思う。もちろん全力で頑張って何かを達成することは素晴らしいことだけど、その後に支障が出たのでは意味がない！だから自分はなるべく頑張らないようにしている。一見怠惰ではあるけど、自分の特質上、結果的に良かったことが多い。出来ないことだったり助けて欲しい時は、周りの人に声をかけて助けてもらうというのも一つの生き方だと思う。



「寄り道をする経験」

退学・進学経験の過程と、自分との付き合い方・自己決定についてインタビューしました



自己紹介をお願いします

自閉症スペクトラム、ADHD、読み書きの困難があります。近年、体に大きな変化があり、右手親指のみ自由に動かすことができます。私は、二度の高校生活や大学進学、その後色々な場所で働く経験をしました。そして、再び今年の春に県外の大学に進学します。今は一人暮らしの準備中です。

大学退学から改めて進学に至ったお話を聞かせてください

高校で特に読み書きや複数人での会話が聞き取りにくい等困難を感じていて、2年の秋頃に学校に行けなくなりました。大学進学はしたかったので高校は休学し、高卒認定試験を取得。大学は関心があった分野に進学しましたが、感じる困難を人に伝えることができず、入学後すぐに退学しました。

退学後、大事な経験をしました。通っていた料理教室でレシピを読めないことを伝えた時、先生がふりがなをふってくれたのです。それは、初めて誰かに手伝って欲しいと伝えた経験でした。その経験が自信になり、私は夜間定時制の高校に編入しました。ICTを使った勉強方法や生活スタイルと出会い、自分の困難を相手に伝えることもできるようになりました。また、自分らしい学びを続けることができ、進学への意欲も湧きました。ただ進学希望校に配慮の話し合いをしている中で疲れてしまい、一旦自立訓練所に通うことにしました。その後、複数の場所でアルバイトを経験するうちに、やっぱり私は学びたい！進学したい！と強く思い、今に至ります。

進学先はどのように決めたのですか？

一番に優先したことは、学びたいことです。支援や配慮は

後から考えることにしました。また、受験方法は自分の得意なことを活かしたかったので、科目受験ではない他の方法がある大学を探しました。希望分野があり試験方法がプレゼンテーションという大学を見つけ、受験しました。

受験で得た配慮と行った準備を教えてください

大学は開校して間もなくして配慮申請の形式がなかったため、共通試験や他大学の配慮申請の形式を参考にして自分の説明書類を作りました。コロナで学校訪問が難しかったので受験1年以上前からオンラインでやりとりをしました。

得た配慮は、機器の持ち込みは自由だったため、自分のパソコン・スイッチの使用、介助者の付き添い（受験時のパソコン設置等の介助を含む）、ノイズキャンセリングヘッドホンの使用、私は体調で声を出しにくい日があるため、事前に自分の声を使って録音したものや合成音声の使用許可です。

入学後の配慮は話し合いを進めています。一から支援体制を作る必要があり大変なこともあります。決まっていないからこそ自分に必要な配慮を考えて伝えることができ、良さも感じています。



後輩へメッセージをどうぞ！

何かにチャレンジしたいと思うとき、反発されることもあるかもしれません。時には心が折れそうになることもあると思います。けれど、必ず皆さんが踏み出す一歩を応援してくれる人はいます。また、休んだり寄り道をしたりする経験は、マイナスなことばかりではなく、力に変えることもできます。私も皆さんの一歩を応援しています！これからも一緒に未来を切り拓いていきましょう！



「自分の在りたい姿を知る」

自分の付き合い方と海外の大学へ進学した過程をインタビューしました



井上 莉緒

Inoue Ryo
2019 スカラー／大学生

自己紹介をお願いします

海外の大学に通っています。視覚・聴覚過敏があり、物事の進め方に細かく厳しいこだわりがあります。

高校を転学されたのがよい経験だったと聞きました。

はい。元は小中高一貫の学校に通っており、必死で「良い子」を務めていました。人が立てる音に対する恐怖などで、適応障害等を患い不登校になりました。学歴を失う悔しさと恐怖に苛まれましたが、通信制高校に入り、温かい友達と先生に恵まれ、「勉強ができる私」から「ドジしても良い私」になりました。成績を褒められることではなく、家族や友達といることが楽しいと感じられるようになりました。アルバイトで社会との接点を作ったり、朝焼けをみて生きているなと感じたり、テクノロジーを活用した学習や生活の工夫を試したりと、ゆっくり歩める良い時間を過ごしました。

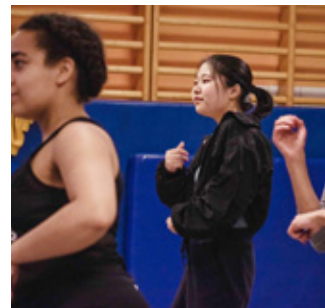
進学先は海外の大学を選んだんですね。

異文化を肌で感じたかったのと、英語を日常的に使って将来のキャリアに備えたかったからです。お世話になった精神科医の方に憧れて医学部にしました。この国にある予備校に通いましたが、授業中の耳栓使用を快く許可してもらえました。



大学生活はいかがですか？

授業も異文化交流も面白いです。オンラインの授業は時間や体調管理が容易なので好きでした。余暇は、親とテレビ通話をしたり、家でゆっくり休んだり、ルーティンの細かい調整等の予定管理やタスク管理、そのためのテクノロジー探し等、使っていて気持ち良いものを見つけて楽しんでいます。



次、日本の大学に進学すると聞きました

大学の不規則な時間割と通学にやはり苦痛を感じたのと、医学を学ぶうちにやっぱり心理学を学びたいと思ったので、春に日本の通信制大学に進学します。

後輩へメッセージをどうぞ！

ADHD・ASDを抱える私が「忘れっぽさを補いこだわりを活かすための”第二の脳”づくり」のために試した数百のツールの中のエースを発表します！

①まずは「現状把握」段階のツール。自分を客観視し、在りたい姿を知り、ツールとの相性を把握しましょう【16 Personalities、ディグラム診断、宿曜、(周囲の人に聞いてみる)】目安：1～6ヶ月。②自己分析ができれば、小さいことからゆっくり習慣化してみましょう【Fabulous、みんチャレ、Sleep Meister】6～36ヶ月。③数年後の自分を見据え、やりたいことをやってみましょう。まずは3時間のアルバイトや1時間の勉強で十分です【Google Calendar、アラーム、Todoist、Habitica】12～36ヶ月。④第二の脳づくりのため、①～③を繰り返していきましょう！【Notion、Focus Todo、Toggl Track、Integromat等】。

第二の脳づくりのステップ0は、「自分を認めてあげること」です。これを読んでくださるあなたは成長への意欲や関心を持っているのだと思います。素敵なことです。自分を褒めてあげてくださいね。小さな成功体験を重ねて、少しずつステップアップしていきましょう。なお「やりたくない、どうでもいい」と感じる時は、心や体が疲れている時なので、まずはたっぷり自分を休ませてあげましょう。質問等ありましたら、事務局へまずご連絡いただけたらと思います。



「その決定はその時点での最良の決定」

大学受験・介助者をつけた生活と自己決定についてインタビューしました



自己紹介をお願いします

高校3年の時に部活動で受傷し、頸髄損傷により首から下に麻痺があります。24時間365日、人工呼吸器を使用し、介助者をつけて一人暮らしをしています。大学進学前に東京で一人暮らしを始め、その後大学へ進学し大学院を経て、現在司法試験の受験生です。

大学進学前に一人暮らしをされているんですね

まず生活を整えることが必要でした。大学進学を希望していたし、実家のある自治体では自分の必要な介護・医療の体制が整いそうになかったので上京を決めました。一人暮らしに必要な支援や介助者の利用については、東京の同じ障害のある人に大きな影響を受けました。

入試から大学進学までの話を聞かせてください

夢はひとまず、まずは大学に行きたかったです。3度センター試験（現、共通テスト）を受けました。介助者がつき、書見台の利用、パソコン解答、計算機能のない数式ソフトの利用、代筆等を利用しました。一番の課題は「計算」をどうするかということだと思いました。ホワイトボードを使い、計算過程やグラフ等を代筆してもらうことも実施しましたが、口頭で全てを伝えるのは困難でした。

最終的に苦手科目が必要なくマーク式で受験できる大学を探し、一般入試で私立の法学部に進学しました。

大学・ロースクールでの学習環境はいかがでしたか

支援室はなかったけれど事務の人がよく対応してくれて、その人とは今でも交流があります。学部の担当者と話して依頼したことは調整してくれたし、先生方も常に気に掛けてく

れました。教室のスペース確保から試験時の別室利用等に加え、試験のパソコン利用や時間延長、本の裁断等を利用しました。体力を考えて週4で1時限目を抜かすとかの時間割調整をしたりしました。学部は4年で卒業しました。今思えば、もっと学生ばいことしてもよかったのかなと思います。

ロースクールの勉強は忙しかったです。実習は必修で、弁護士事務所に行って記録を読む、面談同席、裁判の傍聴等がありました。実習先で介助者がどこまで入れるか等の問題がありましたが、学校が窓口になって調整してくれたので実習に専念できました。

介助者をつけた生活話が聞きたいです

身体的な介助は、介護給付費の支給、医師の訪問診療、訪問看護等を利用し、自分が依頼したとおりで実施してもらっています。食事は、宅配を利用したり一緒に買い物に行き、レシピサイトを出して作ってもらったりします。残りの食材管理と介助者のスキル、栄養バランスと自分の食べたいものを考慮して献立を決めるのが大変です。掃除・洗濯等は、自然と曜日ごとのルーティンになっています。ただ曜日で仕事を割り振ると偏りが出るので、特定の介助者に負担が集中しないような配慮が必要と思っています。金銭管理はトラブル防止のため、現金は介助者の交代時に残高が合っているか確認しています。買い物はほぼカードなので、ネットで明細確認するだけで楽になりました。

全体的に、本人の希望に沿わないことをしないのは原則だと思うけれど、一方で何かあった時を考えると一概には言えないですね。安全管理と本人の自由意思のバランスだと思います。

後輩へメッセージをどうぞ！

人生ではあらゆる局面で意思決定が求められます。場合によっては理想と異なる意思決定をせざるを得ないこともあるかもしれませんが、後になってその決定に後悔することもあるかもしれません。うまくいかなければ立ち止まっても良いし、方針転換をしても良いと思います。あなたが考えたその決定はその時点での最良の決定です。

うまくいかないときに障害を理由にしたいくなることもあるかもしれませんが、人生はやり直せません。困ったときは人を頼ることも大切ですし、努力すべきときに努力することもまた大切です。自分の人生に責任を持てるのは自分しかいません。自分自身が納得できる人生を送れることを期待しています。



「自分の興味を追い求めたい」

自分の持つ関心のある物事を追求し、大学院進学、学習との付き合い方についてインタビューしました



自己紹介をお願いします

国立大学の数理科学研究科博士課程です。自閉症スペクトラム(ASD)と学習障害(書字)、吃音があります。書字は書く速度が遅く、字を書くときに非常に疲れるので大学3年位からはLaTeXを使ってノートを取るようになりました。なおコミュニケーションは得意ではありませんがあまり苦でもないで、学科の飲み会にはよく参加していました。

大学入試の受験方法と入学後の学習について教えてください

学校に学習時のパソコン利用の協力を要請するものの難しく、模試だけはようやくパソコン受験をしました。入試はパソコン利用が不可で、時間延長とマークシートのチェック式で受験しました。

大学入学後は支援室等を利用し、パソコン受験やマークシートのチェックシート化、時間延長等の配慮を受け単位を取りました。数学科への進学後は講義の単位認定がレポート形式になったので配慮はあまり受けていません。

大学院へ進学した決め手は？

自分の能力なら大学院へ行ってもやっていけるという認識と、大学院に行けば選べるキャリアも大幅に広がるという考えが大学生活の間に固まったので、大学院進学を選びました。奨学金等を得られる当時はなかったけど、結果的に大学の奨学金(に準ずる制度)を得ることができました。進路を決める以前には教員免許を取得したり、インターンに参加したりしたうえで判断しました。

大学院での活動(研究)を教えてください

コロナ禍で下宿先から実家に戻り、リビングでパソコン

と向かい合ったり、寝転がったり、歩き回ったりしながら今取り組んでいる問題の証明方法を考えています。時には研究集会に参加したり、その集会で発表するための資料作りに勤しんでいたり、事務書類を数日かけて作ったりもします。実家暮らしは研究に専念できるものの、論文にアクセスできても図書は申請から手元に届くまで時間がかかるため、今取り組んでいる問題が解決した時のために新しいテーマを探すうえでは不便さも感じています。

今後の展望を教えてください

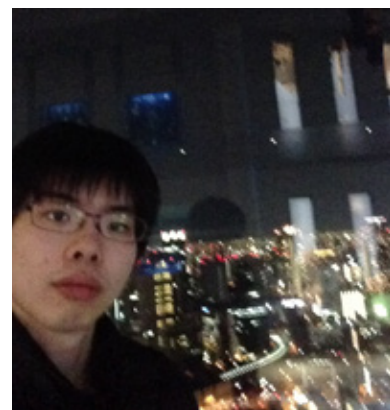
今の希望は数学の研究で食べていくことであり、そのために、自分の専門に合致する研究職の求人があれば場所を問わず応募したいと思っています。私の専攻はどちらかといえば社会に還元しやすい分野であり、実際に多くの問題が実社会における要請から成り立っているため、企業での職も比較的探しやすいはありますが、あくまで自分の興味を追い求めたいと考えています。

学ぶことの面白さを言葉で表現するとしたら？

私にとって学ぶことの面白さとは、理屈や打算ではなく、ただ知りたいという欲求そのものです。誰かに認められたいとか出し抜きたいとかではなく、あくまでも自分自身の中で完結している欲求。他の人と同様に興味のある分野とそうでない分野というものがあるし、興味が後から湧いてくることもあるが、そうでないものに対しては、どうあがいても面白くない。何にでも面白さを見出す必要はないと思っています。ですが高校同様大学でも興味のない科目も勉強する必要があるので、そこは苦労しました。

後輩へメッセージをどうぞ！

私は自分に最適な配慮をうまく立ち回って勝ち取ったわけではなく、結果的に学生生活がうまく回った側なので、生活がうまく回った後のことについて話させていただきます。必要な配慮や大きな夢が大事なのと同じように、日々のより快適な生活も学びのために非常に大事です。特に私のような障害を持っている人は生活面の不便をおろそかにしがちですが、小さなストレスが蓄積されて無視できない不調になる、とならないように意識的に時間をとって環境を改善することで、より健全な学びを手に入れることができると思います。



「だんだん簡単に、楽しく思えてくるかも」

大学生活から就職、働いてみて感じることに
インタビューしました



自己紹介をお願いします

大学卒業後に就職し、現在は市役所の障がい福祉課で障害者手帳の業務に携わっています。ウールリッヒ病(筋ジストロフィー)があり、筋力が弱く、現在は呼吸の補助の為、夜間のみ人工呼吸器を装着しています。

大学生活についてお話を聞かせてください

法律について勉強したかったので、国立大学の法文学部に入りました。高校までは生活圏が家と学校のみでしたが、大学生活では一人暮らしを経験し、色々なところへ足を運びました。民間の研修旅行に参加した時は、主催者の方に人工呼吸器を持ち込むことについて事前にメールで相談していたので、非常に有意義な旅となりました。大学進学後は自分のしたいことをするために、周囲に自分の障害や必要とする手助けを説明する機会が増えました。

就任するまでの経験を教えてください

公務員の一般枠での採用だったため、障害があることを知ってもらうため配慮申請書(自己紹介に近いもの)を作成し、人事課長宛に提出しました。内容は、今の体の状況を説明し、エレベーターや洋式トイレがあり、長時間の歩行等ない部署に配属してほしいと記載しました。日程的に可能だったため、一般枠で受からなかった時には障害者枠で再度申し込むつもりでした。

今後の展望を教えてください

勤続して5年経つので、異動が気になっています。異動先の希望が出せるので、市営の市場や学校事務など新しい職場で見識を深めたいです。東京で生活してみたいし、一

人で呼吸器を持って海外にも行きたいです!

後輩へメッセージをどうぞ!

参考となるかどうかは分かりませんが、自分が働くうえで感じたことをアドバイスさせていただこうと思います。

まず、入社前について。業務量・業務時間など配属先の決定に関わることは、採用後すぐ相談しておく方が良いですが、将来の未確定なことまで、事前に説明する必要はないように思います。私も、将来職場に電動車いすや人工呼吸器を持ち込む可能性があることを申告しておくべきかどうか迷いましたが、今考えると不要でした。

他には、研修期間中でも職場に挨拶に行くことをお勧めします!配属先では、障害のある新人さんが来るということで、あなたと同様、いろいろと心配しています。配慮依頼文に書かれた少ない情報で、配置や担当業務を考えてくれていますので、まずは自己紹介に行きましょう。

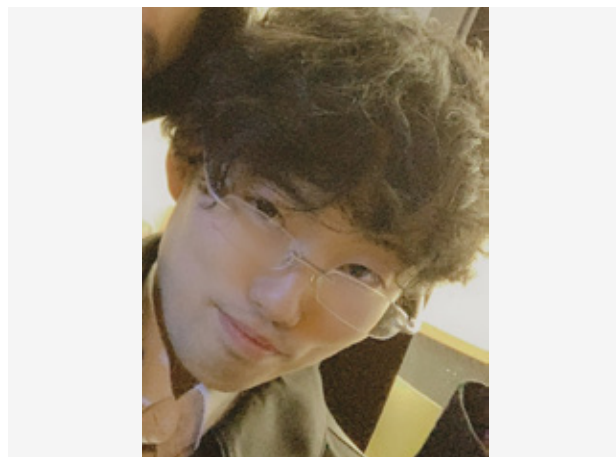
次に働き始めてからのことです。業務量が多いと感じた場合は、早めに相談しましょう。誰でも、自分の持ち分(一人分)の業務があり、誰かの業務が減れば誰かの負担が増えます。後々お願いするよりも、4月など時期を考えてお願いする方が、人間関係もうまくいきます。

その時に「私には、このような大変さがあるので、こういう風に手伝ってください。」と必要な援助が分かるような、相手の立場に立った説明をしていきましょう!

また、「これはできません。」と決めつけて相談するより、「自分としては〇〇の理由で難しいと思う」とすることで、上司や同僚が良い代替案を考えてくれるかもしれません。

いろいろと配慮してもらうためには、自分も周りの人に配慮する気持ちを持つことが重要だと思います。人間は常に100%全力で頑張り続けることはできません。無理せず、人の助けを借りながら、自分のやり方を模索してください。

最後に。今までの自分には難しそうなことでも、興味があれば挑戦してみたいかがでしょうか。だんだん簡単に、そして楽しく思えてくるかもしれませんよ!



5

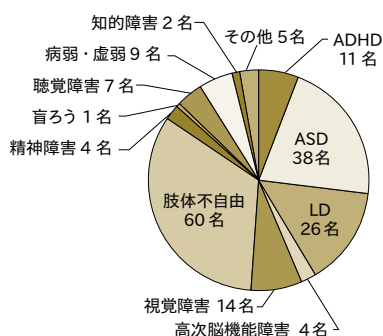
DO-IT Japan スカラーのデータ

今年度は、9名の高校生・大学生が選抜されました。過去選抜されたスカラーは、高校卒業後、多くの人数が大学進学し、大学後の進路(大学院進学・就労等)に進む学生も多くなりました。翌年度も、春にスカラープログラム参加者を募集いたします。3月上旬にウェブサイトにて応募要領が掲載されます。

DO-IT Japanは、障害や病気のある若者の高校への進学とその後の就労への移行を支援することを通じて、障害のある若者の中から未来のリーダーを育成するプロジェクトとして、活動を続けていきます。

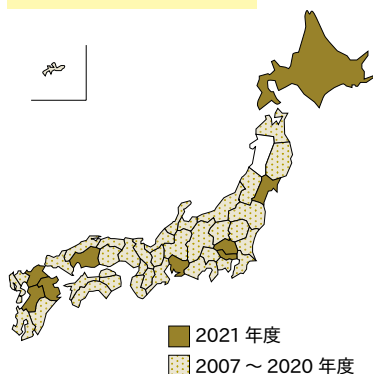
DO-IT Japan 2021年度データ (2021年12月)

スカラーの障害内訳



※上記はスカラー総数 130名の障害内訳(重複あり)

スカラーの出身地



スカラーの人数と進路



スカラー総数 **130名**

※ジュニアスカラープログラム(2013～2015年に実施)終了により上記統計から除外。退会者を除く。



大学進学
109名

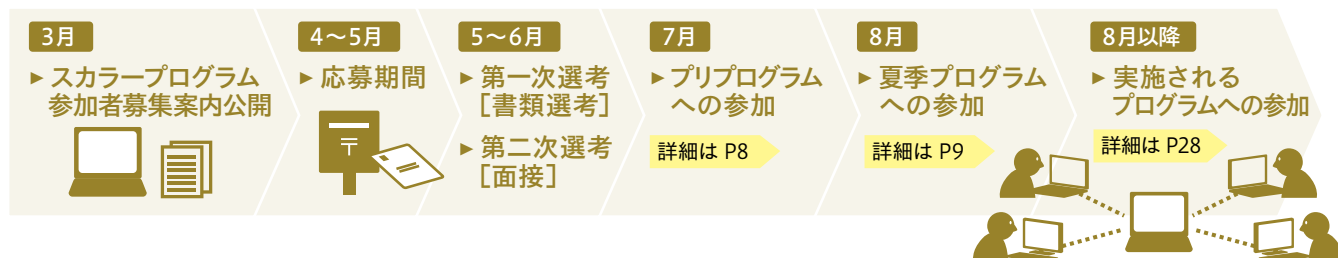


就職
50名



大学院、
専門学校進学
20名

応募方法の流れ



DO-IT Japan について



詳しくはウェブサイトをご覧ください!
<https://doit-japan.org/>



ご寄付のご案内

DO-IT Japanの活動は、皆様のご協力・ご支援によって支えられています。
※寄付に対する税制上の優遇措置など、詳しくはウェブサイトをご覧ください。



お問い合わせ
DO-IT Japan 事務局

153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学先端科学技術研究センター
社会包摂システム分野

[Tel & Fax] 03-5452-5443
[Mail] toiawase@doit-japan.org
[Web] <https://doit-japan.org/>

6

共催・協力・後援

DO-IT Japanは、共催企業4社の皆様と連携し、プログラムの運営や企画開発を行っています。また、協力企業や官公庁の皆様からも、運営のご支援や応援をいただいています。個人として活動や運営をサポートして下さる皆様にも支えられています。

2021年度の共催企業、協力企業、後援、活動をサポートくださっている方々をご紹介します。

(50音順)

共催企業

ソフトバンク株式会社

特別聴講生プログラムを実施するにあたり「iPad」を貸与いただきました。また、全国からオンラインで参加する参加者の円滑なやりとりのため「iPhone」を貸与いただきました。こちらは、2021スカラーがオンラインでプログラムに参加する姿を記録する機材としても使用させていただきました。

夏季プログラム4日目開催のコンカレントセミナーにて、社員の方とセミナー内容を作成し、話題提供者としてご登壇いただきました。



日本マイクロソフト株式会社

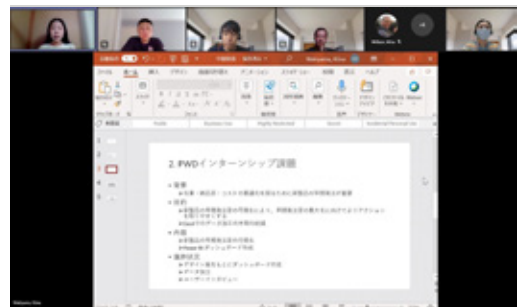
夏季プログラムを開催するオンライン会場として「Microsoft Teams」を利用させていただきました。また、夏季プログラム3日目にて、社員の方に話題提供者としてご登壇いただきました。最先端のテクノロジーの紹介や、会社で取り組まれている活動、社内の様子について話題提供いただきました。2019年度から行っているスクールプログラムを、活動報告内容をウェブサイトにもまとめ、掲載しました。

ウェブサイト↓



P&G ジャパン

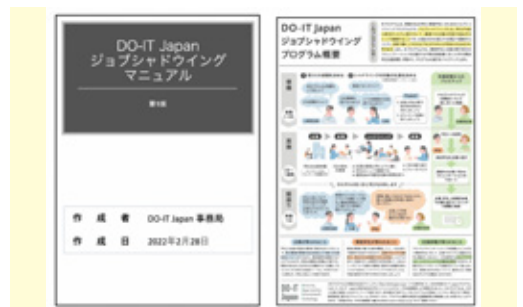
障害のある大学生向けの「インターンシップ・プログラム」を、DO-IT Japanと共同実施しました。大学生スカラーが、その持てる力を発揮して、プロジェクトで求められる業務を遂行できる環境の設定、職場をインクルーシブに変えていく取り組みを共同で開催した他、社内のジョブシャドウイング・プログラムに大学生スカラーが参加し、実際に社員の皆さんが働く様子を知り、将来の働き方について考えを深める機会をご一緒しました。



株式会社みずほフィナンシャルグループ

障害のある大学生向けのジョブシャドウイング・プログラムを、DO-IT Japanと株式会社みずほフィナンシャルグループの共催事業により開発しています。開発した本プログラムの実施方法及びマニュアルは、ウェブサイトに掲載しました。また、DO-IT Japanスカラーとの「雇用」をテーマとしたオンラインミーティングを共同開催し、インクルージョンと活躍についてスカラーとディスカッションしました。

ウェブサイト↓



協力企業

イースト株式会社

テキストを日本語・英語で読み上げることができる音声読み上げ Word アドインソフト「WordTalker」をご提供いただきました。夏季プログラム 3 日目で、教科書やプリントを電子データに変え、読み上げ機能を使う体験をしました。スカラーが、日常の学習場面で活用させていただいております。

ウェブサイト↓



株式会社 atacLab

自分の読み書きの速度が、同学年と比べてどの位置にあるのかを評価することができるアセスメント「URAWSS II」「URAWSS English」をご提供いただきました。プリプログラムより、学習場面で配慮を求めるときに、自分の読み書きの状態をエビデンスを持って他者に説明するためのアセスメントとして使用させていただきました。

ウェブサイト↓



株式会社カプセルアシスト

DO-IT Japan の開催するプログラムやイベント、シンポジウムにて、音声認識アプリ「UD トーク」を用いた「遠隔文字通訳」を実施いただきました。文字通訳が、聴覚に障害がある人の利用だけでなく、会話を視覚的な情報にして、会話の流れを整理する方法としても活用できることを教えていただきました。

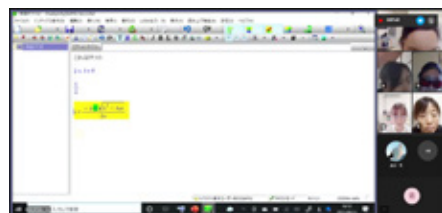
ウェブサイト↓



特定非営利活動法人 サイエンス・アクセシビリティ・ネット

日本語と数式の入力に加え、それぞれ音声読み上げができるソフト「ChattyInfty」をご提供いただきました。プリプログラムより、身体障害や読み書きの障害がある等、数式入力と読み上げが必要なスカラーとノートテイク体験をしました。スカラーが、日常の学習場面で活用させていただいております。

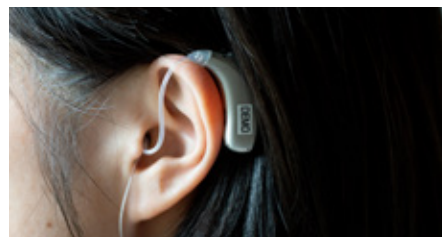
ウェブサイト↓



フォナック補聴器

先生の声など特定の人の声を聞き分けることに困難がある人がいます。夏季プログラム期間中、デジタルワイヤレス補聴援助システム Roger (ロジャー) シリーズをご貸与いただきました。オンラインにより開催されたプログラムへ参加する場面での聞こえの補助に加え、発信する側の音質向上にも活用することができました。

ウェブサイト↓



後援

厚生労働省

文部科学省

謝辞

[夏季プログラム]

- ・講師、話題提供者 / 35 名 (10 大学、11 企業・団体、省庁)
 - ・大学生チューター / 16 名 (11 大学)
 - ・スタッフ、アドバイザー、ボランティアスタッフ / 31 名 (14 大学、5 企業・団体)
- その他、多くの方のご寄付・ご協力をいただいております。深く感謝申し上げます。



